
マンガ・パニックっ！

木崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンガ・パニックっ！

【Nコード】

N9849B

【作者名】

木崎

【あらすじ】

もし、自分が漫画の世界に入れるなら……。運命が偶然か、「漫画」の世界へと入ってしまった二人の男女。そこは、様々な漫画が混同する世界っ！

プロローグ（前書き）

この作品は、様々なジャンルの漫画作品が混同する物語です。一つの作品に絞られていませんので、その辺りはよろしくお願いいたします。

プロローグ

これは、マンガの世界だから……。

白紙に描かれた一人の創造者による、フィクションの世界。

しかし、もはやそれはフィクションという域を超えて、自分を取り込んでしまう。あたかも、フィクションの世界が現実かのように……。

それが「漫画」だ。そんな漫画の魅力に取り付かれた二人の男女の物語。

これから彼らは体験する、まるで「漫画」のような体験を……。

ここは、とある住宅街の一軒屋。今、ようやく朝日が昇り、新たな日の始まりを生き物に示しだしていた……。

ハズなのだが、そんなことにも関係なく、いわゆる夜更かしをしている

青年が一人……。

「お、おもしれえ……！ 次の巻、もう発売してんのかなあ！」

今日、本屋行って続きを買わなくちゃな」

鈴木宗司^{すずきむねし}、19歳。立派なフリーターである。

日中はアルバイトをして、夜は大好きな漫画に打ち込む。これが、彼の毎日の生活だった。それでも、幸せだった。漫画が読める生活さえできれば、

彼にとっては、何の問題も無かったのだ。

「……っ！……も、もう朝かよ……。
はぁ……またやつちやったよ、俺……。」

漫画の世界から抜け出す、宗司。そして、自分のいる世界へと引き戻される。

漫画を読んでいる間は、まさにその世界の住人。しかし、一度、現実に取り戻されると
どうしようもない自分がいることに気づく。ため息をついて、漫画を眺める宗司。

「……もし、俺が漫画の主人公なら……。
こんな生活してないんだろうな。強い敵と戦って、
あるいは、恋愛して……。はぁ……。何なんだよ、俺の人生って……。」

自分と漫画を比較してしまう宗司。空想の人物に劣等感を感じても
どうしようも無いということもわかっている。ふと、宗司は時計を見る。

そこで、さらなる現実を思い知らされるのであった。

「ん？4時22分……。あ、ああ！！新聞配達、忘れてた！！
やばい、早く行かないと、今度こそクビになっちまうよ！」

彼のアルバイトの一つに新聞配達があった。慌てて出かける支度をする宗司。

朝食なんてもつてのほか、顔を洗うこともせずに、玄関から出ようとする。

その時、ふと思い出す。

「あつ、そういえば……バイトの友達が、オススメの漫画を貸してくれて……。」

へへっ！じゃあ、俺のお気に入り、コレとあれとお……………！

よしっ！！」

漫画のことになると、うれしそうな表情になる宗司。自分のお気に入りの

漫画をカバンに詰め、颯爽と玄関を飛び出す。これが、鈴木宗司。主要人物の一人である。もう一人はと、言つと……………。

少女が目を覚ますと、まず先に意識が足へと向かった。ベットの上で、

少女はすくつと起き上がり、自分の包帯で、グルグルになった右足を見つめる。

そう、少女の右足は、もう動かない……………。

「……………なんで……………なんで、私が……………。
う、う……………う……………」

右足を見るたび、彼女の目からは涙が出てくる。不慮の事故でケガを負った

右足。痛みとか、そういう感覚の次元ではなく、精神的な痛みが、彼女の涙を作っていた。その度に、少女はある行動をする。そう、それは……………。

「……………ま、また泣いちゃった……………。」

ダ、ダメだよ……………。漫画のキャラクターは、皆、強いのにね……………」

少女の心の支え、それは漫画であった。近くに置いてある漫画を取り、
涙をぬぐう。少女の名は岡村佐奈^{おかむらさな}、12才の小学6年生。
車椅子を使って、今日もまた学校に行こうとする。

「（・・・今日は、どの漫画にしようかな・・・。
学校のみんなに、見てもらうんだ・・・。）」

「佐奈・・・。またあんだ、学校に漫画を持っていくつもり？」

「っ!!・・・お、お母さん・・・。」

「あんだ、いい加減にしなさいよ!漫画ばっか読んでたら、バカになっちゃうわよ!

たださえあんだは、人一倍勉強するしかないのに。その足のせいで・・・。」

「っ!!・・・ひ、酷いよ、お母さん・・・。」

私だって、好きでこんなものになっただんじゃないっ!」

「・・・と、とにかく、早く学校に行きなさい!遅刻するわよ」

佐奈は、もともとから病弱であった。両親には色々と迷惑をかけていたのだ。

そこで足を大ケガしたとなれば、負担もまた倍増となる。母親のストレスが溜まるのも

無理は無かった。佐奈は、暗い表情で家を出る。

「（・・・もう・・・嫌だよ、こんなところ・・・。」

私も……私も、漫画の世界に行きたい………」

車椅子を使って、ゆっくりと前へ進む佐奈。彼女の家庭は、お世辞にも良いとはいえなかった。だからこそ、佐奈は望んだ。漫画の世界へ、行きたいと。

漫画に、自分の生きる希望を見出していた。これが、もう一人の主要人物。

この二人が、交差する。そして、物語は動き出していく……。それは、運命の一瞬の出来事。ほんのささいな、朝の出来事。

「ふう」。何とか、配り終わったな。後は、あいつらに漫画を貸すだけだなっ。

きっと、すっげーハマるからなあ！」

「（……こんな世界、もう嫌だよ……）。誰か、私を助けて……私を、私を……」

街角の出来事。宗司は、軽快な運転で自転車をこぐ。その自転車の進む先には、角を曲がってこようとする佐奈の車椅子が。運命は、止まらない……。

「っ！！あ、危ねえ！！」

キキーンッ！！

「え・・・・・・・・？」

ガシャアアアアン！！

自転車にぶつかり、意識不明の佐奈。そして、車椅子にぶつかって吹き飛ばされ、

建物に激突し、同じく意識不明となる宗司。野次馬が集まってくる。

彼らは、

生きたまま、死ぬことになったのだ。神は、二人に罰を与えた・・・。

だが、しかし・・・・・・・・。

二人は、すぐに目を覚ますことができた。別々の場所で。神は二人に罰を

与えた。それと同時に、二人に幸を分けた。二人が目を覚めた時、目の前に広がったのは、まさしく、漫画の世界であった・・・・・・・・。

『NARUTO 編』 ナンバー1：木の葉ノ忍者！！

少女が目を覚ますと、目の前に広がっていたのは見知らぬ町。目を丸くさせて、周りの風景を見渡した。何処か懐かしいような、それでいて新鮮味を帯びていたその世界に、少女はしばらく動けなかった。

「こ．．．ここ．．．何、処．．．？」

今の少女にとって、過去などどうでも良かった。例えば、自転車にぶつかって意識を失ったという過去があつたとしても、この目の前の風景の方が、彼女の意識を支配していた。そして、ようやくゆつくりと立って、歩き出す。

「わ、私の．．．町じゃ、ない．．．」

でも、何で私がこんな所に．．．あつ

少女は、ようやく気づいた。とある、とんでもないことに。

少女は歩いている。無論、車椅子など使っていない。いつのまにか、佐奈の右足は完全完治していたのだ。それに喜ぶ佐奈。

「あ、足が、足が動くっ！私の．．．私の、足が．．．」
歩ける、歩けるよ．．．走る、走ることもできるっ！

佐奈は、喜んだ。そして、歩けること、走れることに夢中になった。なぜ、右足が治ったということなど考えもせずに。いや、考えたく無かつたのかもしれない。今の佐奈にとって、そんなことはどうで

も良いのかもしれない。

「（きつと、きつと神様が、不幸な私のためにやってくれたんだ・
・・！

これで、私は、私は・・・っ）」

夢中になって、ただ走り回る佐奈。自分が見知らぬ町を、ただひたすらに走る。しかし、佐奈はあることに気づかなかった。この町には、佐奈以外、誰も人がいないことに。何も気にしない佐奈が、ちょうど建物の角を曲がるうとした時。

「（走れる・・・走れる・・・っ！

気持ちいいなあ・・・これが、夢じゃ・・・っ）」

ドガッ！

「痛え！！」

「い、痛いっ！・・・ご、ごめんなさいっ！私、夢中になって、走ってて・・・っ」

一心不乱に走っていたために、誰かと衝突してしまう佐奈。二人とも、

地面に手をつけて倒れる。すぐに、佐奈は相手側の容態を気遣って、近寄る。すると、相手の方は・・・。

「い、痛てて・・・。ちゃんと、前を見て歩けばよオ！！
おまえの目ん玉は、真横にあるのかよっ！」

「う、ごめんなさいっ！！・・・？・・・ってばよ・・・？」

「まあ、余計に腹が減っちゃったしよオ。何処に行っても、ラーメン屋は見つからないしさア！」

「き、黄色い服・・・額に、木の葉の額あて・・・
ツンツンの髪・・・小っちゃい背・・・」

「？・・・な、何ブツクサ言ってたんだよ・・・」

「・・・う、うずまき・・・ナルト君っ！！！」

佐奈のぶつかった相手、それはみぎれもなく「うずまきナルト」、張本人であった。

「NARUTO」という漫画の主人公、うずまきナルト。それを知っている

佐奈は、余計に興奮を抑えきれない。

「わ、わっ！！ほ、ほらっ、ナルト君、握手、握手！！」

「うえ、あえ、え！？い、いきなり、何すんだよォっ！」

「ナルト君、小っさーいっ！！私と、身長同じくらいなんだねーっ！！」

「うつ！！ひ、人をバカにするのも、いい加減にするってばよォ！！
だいたい、オマエは誰なんだってんだよォー！」

興奮する佐奈と対照的に、何が何やらまるで事態がつかめないナル

ト。

佐奈は一度、ゆっくりと深呼吸して、もう一度ナルトを見る。だがやはり、夢ではない。これは、現実なのだ。

「わ、わ、私い！岡村佐奈って言います！私、私……！！！」

グウ……

「……………オマエ、腹減ってんのか？」

「……………う、うん……………」

「丁度良いやつ！人が人つ子一人いなくて心寂しくってよオ！一緒にラーメン屋を探そうぜっ」

「(……………やっぱり、ラーメン屋なんだ)」

佐奈は、自分の空腹にようやく気づく。ナルトも空腹という点と、人がいない

ということから仕方なく、佐奈と共にこの見知らぬ町を探索することに。

しばらく、歩き続ける佐奈とナルト。

「そ、そういえば、ナルト君っ！サスケ君を探す旅、頑張ってね！」

「……………サスケえ？あー、あのヤローかつ。本当に、何でサクラちゃんは

サスケのヤローが良いのか、わからん……………！！！」

「……え、ええ？……だ、だって、ナルト君とサスケ君は・

無二の親友じゃあ……」

「じよ、冗談言っつなつてばよオ！！なんでオレがあんな奴と親友にならなきや

いけないんだよオ！」

「え、ええ！？……も、もしかして……。ナ、ナルト君。螺旋丸らせんがんの練習は苦しかった？」

「らせんがん？……ラーメンの具か？」

「……我愛羅君との勝負、どうだった……？」

「があら？……新作ラーメンか？」

ここで、佐奈はとんでもないことに気づく。確かに、夢が現実か、目の前にいるのは確かにうずまきナルトだ。だが、どうやら彼は漫画は始まった段階のナルトらしい。つまり、弱小状態の彼なのだ。

「（う、うつそあ）。もしかして、このナルト君って……。序盤のナルト君、ってことかなあ……）」

「まっ、ラーメンの種類が増えるのは構わないけどよっ！
言ってなかったけど、オレ、木の葉隠れの里の、エリート忍者なんだってばよっ！」

「……う、うん。(知ってるけど。エリートが、嘘つても・・・)」

「オレさ！オレさ！ゼツターに、ほかけ火影になってみせるってばよっ！！
それで、サ、サクラちゃんとも、け、け、け……！！」

「……結婚？」

「だぁーっ！！そ、それは置いといて、オマエはどうなんだよ？
ってか、オマエって何者？忍者学校の後輩か？」

「う、うーん……。ま、まあ、そうかな……。」

ナルトの質問に、曖昧な返事しかできない佐奈。ナルトと出会えた
ことの
嬉しさでまともな返事ができないということもあるが、**実際問題、**
なぜ

佐奈がここににいるのかも、よくわからないのだ。しばらく歩く二人

「そつれにしてもよォー。本っ当にココはラーメン屋がねえな。
ってか、ココって何処だつてばよォー」

「え？ナルト君、この町を知ってるんじゃないの？」

「ん？オレが知ってるわけねえって。朝起きたら、この町のだ真ん
中で

寝そべってたんだよ」

「え、ええーっ！ー！」

衝撃の事実だった。てつきり、ここは「NARUTO」の世界だと思っ込んでいたのだ。だが、その主人公のナルト自身、この町は初めて来たという。

まるで事態が掴めない佐奈。

「はあゝ。（ナルト君に会えたのは良かったけど、此処は何処なの？もしかして、このまま飢え死にとか・・・）」

「・・・大丈夫だってばよっ！」

「え・・・？」

「オレがきつと、何とかしてやるってばよっ！
火影になる男が、誰かを救えねーなんて恥だからなっ！」

「・・・ナ、ナルト君・・・」

ナルトに励まされ、少し、希望を持ち始める佐奈。しかし、そんな二人を

付狙う影がいることに、まだ二人は気づいていなかった。空腹のまま、

歩き続ける佐奈とナルト、だが・・・。

「っ！！に、逃げろ、オカムラっ！」

「え、ええ！？（つていうより、名字で呼ばないで・・・！）」

ガキンッ！

いきなり、ナルトが佐奈を突き飛ばす。わけがわからず、地面に叩きつけられる

佐奈。すばやく起き上がり、さきほどまで自分がいた場所を見るとそこには、まさしく「手裏剣」が刺さっていた。

「しゅ、手裏剣……！？ナ、ナルト君！これって……」

「……敵の忍者だってばよっ！！姿を現せっ！」

「ほう……。今の避けた、か」

「敵の忍者」、そうナルトは推測した。だが、この世界のことか未だに

よくわからない。本当に、ナルトの世界の敵が出てくるのか、はたまた、

まったく別の見知らぬ敵が……。手裏剣を投げた犯人が、ゆつくりと姿を現す。

「クク、おもしれエ……。丁度、退屈してたんだ。相手が同じ忍びならば、

殺^やりがいがあるってもんだ……」

「（う、嘘でしょ……。この人は……。この人はあ……。！！）

き、鬼人……。再不斬^{さいざん}っ！！」

く NARUTO 編 く ナンバー 1 : 木の葉ノ忍者!! (後書き)

用語説明

サスケ・・・ナルトの戦友かつ親友。ある男を殺すことを目的にしている。現在の連載ではわけあってナルトと別れている。

サクラ・・・カカシ班として、サスケ・ナルトと共に戦い抜いた少女。サスケに好意を寄せているが、ことごとく空振りする。

〈NARUTO編〉 ナンバー2：忍びの戦い！！

佐奈とナルトの目の前に現れたのは、鬼人、再不斬。^{また斬}

序盤設定のナルトは、果たして再不斬を倒すことができるのだろうか。

佐奈は震えながら、二人の様子を伺う。

「（ざ、再不斬……。漫画では、ナルト君自身は戦っていない相手だけど、

今のナルト君じゃ、きっと再不斬に勝てないよっ！）」

「おーいっ！！そのマユ無しィ！テメエーは一体、何者なんだってばよ！

不意打ちなんて、卑怯だぞっ！」

「……。ツチ。任務に来たと思えば、見知らぬ土地に踏み入って出られなくなるとはな。ガキィ、一つ、尋ねる……。」

「な、何だってばよオ！！」

「……。此処は何処か、知っているか？」

佐奈の推測通り、ナルトは確かに再不斬と少し戦闘はしたが、勝利には

至っていない。それに序盤のナルトの実力となれば、勝つには程遠い相手なのだ。

再不斬は、淡々とナルトに尋ねる。それに対しナルトは、かみつくような勢いで答える。

「んなもん、知るかつ!!オレ達だって、ここで迷子になってんだ
つつーの!!」

「・・・そうか。ならば、もう貴様に用は無い。消す・・・!!」

「っ!!!(な、なんだよ、あのマユ無し・・・わ、わかんねーけ
ど・・・

なんか、ヤバイってばよぉ・・・!!)」

再不斬の質問に答えたナルト。すると、一気に周りの空気は変わる。
何か、重く、冷たく、恐怖を駆り立てるような。その気配を察する
ナルト。

無論、佐奈も。急いで佐奈はナルトのもとへ駆け寄る。

「だ、ダメだよ、ナルト君っ!!今は逃げなきゃ、ダメなのっ!
あの人は、四巻でカカシ先生が倒してくれるんだからっ!」

「よ、ヨウカンって、なんだってばよ!!オ、オレは、逃げないっ!
戦うっての!」

「ナルト君っ!!今のナルト君じゃ、あの人には勝てないの!」

「・・・オレってば・・・忍者なんだってばよ・・・!!
もう、逃げないって決めたんだ!・・・逃げないって!!」

「ナ、ナルト君っ!!」

「うおおおおおっ!!」

ナルトは、遮二無二突っ込んでいく。佐奈の言うことは、間違っ

いない。

しかし、もしその根拠をナルトに説明したところで無駄だということもわかっていた。

再不斬は、余裕の表情で走ってくるナルトを見下す。

「クツクツクツク・・・殺してやるよ・・・ガキイ・・・」

「こ、こうなったら、禁断の術を使うしかないってばよっ！！
一時期、封印してたが、開放するしかねえ！」

「?・・・何言つてやがる、ガキが・・・」

「オカムラっ！！どっかに隠れろっ！あの術を使っつてばよオ！！」

「あ、あの術！？（も、もしかして、ナルト君の体に眠る九尾の力を開放させるの！？で、でも、確か序盤では・・・）」

「何だか知らねエが・・・この俺に通用するとも思っているのか・・・？」

「やってみなきゃ・・・わからないってばよお！！」

「あの術」と聞いて、佐奈はナルトの九尾の力を思い浮かべた。果たして、

それがナルトの言う「あの術」なのだろうか。ナルトは走り出したまま、

両手で術を作り始める。そして・・・。

「くらえっ、必殺・・・おいろけの術っ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・（そ、そーいえば・・・・そんな術がったような・・・・。ナルト君、本当に勝つ気あるのかな・・・・）」

「ギャハハハハっ！！どうだ、マユ無しィ！！」

ナルトの序盤の必殺技の一つ。「おいろけの術」。いわゆる変化の術を応用した

もので、20代ぐらいの裸の女体に変化できるという術なのである。呆然と、変化した姿のナルトを見る再不斬。すると・・・・。

「どうだつてばよぉ！！オレのおいろけの・・・・」

「・・・・地獄でやってな、ガキ・・・・！！」

「えっ・・・・（う、後ろ・・・・！？）」

「ナ、ナルト君、あぶなーーーーいつ！！」

瞬時にして、再不斬はなるとの背後へと移動していた。そして、背中に

しよっていた大剣を両手に持ち、ナルトの胴体を真つ二つに切り裂く。

「ナ、ナルトくーーーーんっ！！」

スカッ

「っ！！・・・ぶ、分身、だと・・・！？」

「え、ええ？（き、斬られたのは・・・ナルト君じゃない・・・！ナルト君の分身！と、いうことは・・・！！）」

「・・・超必殺、影分身の術だつてばよぉ！！マユ無しイー！！後ろがガラ空きだつてばよぉ！」

「ツチ！！（このガキ・・・！！）」

ナルトのもう一つの必殺技、「影分身の術」。自分の分身を大量に作ることが可能なのだ。ナルトは、初めのうちに分身させておいて、罠をはっていたのだ。

おいろけの術を使ったナルトはすでに分身。そして、勝機を掴む。再不斬の背後をとって、手にしたクナイで切りつけようとするが・・・。

「くらえエー！！マユ無しイー！！」

スカッ

「え・・・！？」

「・・・ガキ、お遊びもここまでだ・・・」

「（マ、マジかよっ！！このマユ無しも・・・分身の術を使つたのかよ！？）」

「・・・チヨロチヨロと・・・邪魔なんだよ・・・！」

ドガッ

「うぐうつ!!」

「ナ、ナルト君っ!!」

裏の裏をかかれたナルト。ナルトが背後をとった再不斬もまた、分身の術を使っていたのだ。空を切るクナイ、そしてまた自分の背後に再不斬がいることに気づく。再不斬はナルトを思い切り蹴り飛ばす。

「う、うう……!!」

「……ガキがこの俺に勝てると思ってんのか……?」

「(そ、そんな……ナルト君が……ま、負けちゃう……。殺され、ちゃうよ!!何で、何で!?ナルト君は、主人公でしょ?ナルト君が死んじゃうハズないよ!ナルト君が……。!!)」

「ま、まだ……負けて、無いつてば……」

グザッ!

「うぐう!!……あ、足に……。ク、クナイがあ……。!!」

「……動くんじゃない。ガキ、おまえの負けだ……」

倒れているナルトを逃がさないために、再不斬がナルトの右足にクナイを突き刺す。動けなくなったナルト。再不斬は大剣をゆつくりと、

ナルトの首に突き出す。

「……………言わせてやる。最後の言葉ってやつをな……………」

「……………つぐ……………ぐそ……………!!」

「(どうしよう!!ナルト君が、ナルト君が死んじゃう……………!!カカシ先生は出てこないの!?九尾の力は発動しないの!?サスケ君は

助けにきてくれないの……………!?)」

「……………土下座してやれば、まだ助け……………」

「ぺっ!!」

「……………ガキ……………ツバをかけるたあ……………良い根性してんじゃねえか……………」

「なあ、ガキイ!!」

「ドガッ!!」

「うぐう!!」

ナルトは、再不斬の頬にツバをはきかける。それを見て、少しニヤケて

思い切りナルトの顔面を蹴り飛ばす再不斬。その様子をただ見ているしかない

佐奈。

「はあ、はあ、はあ……ど、土下座ア……？
じよ、冗談じゃ……無エってばよお……！」

「……ああ？」

「オレは……オレは……木ノ葉隠れの火影になる男……
……！」

木ノ葉流忍者、うずまき……ナルト、だつてばよお……！
「！」

「……もう、聞き飽きた。死ねよ、ガキ……！」

そして、再不斬の目は鬼人となる。両手に持った大剣を振り上げる。
ナルトはどうしようもできずに、「死」を覚悟した。誰も、助けは
こない。

奇跡も、起きない。残された佐奈は……。

「（ナルト君が……死んじゃう……！！
どうしよう、どうしよう！！）」

〈NARUTO編〉 ナンバー2：忍びの戦い！！（後書き）

〈用語説明〉

再不斬・・・霧隠れの抜け忍、桃地再不斬。佐奈の説明した通り、KC4巻でカカシによって倒される。カカシとは2度戦うのだが、2度負ける。

カカシ先生・・・ナルト・サスケ・サクラの班の長。通称、木ノ葉のコピー忍者。写輪眼のカカシとも言われる。

おいろけの術・・・ナルト編み出した分身の術。裸の女体に変化して、序盤はあらゆる困難を乗り越えた。

影分身の術・・・分身の術と、多少異なっている。簡単にいえば、分身の術は一体しか分身を作りだせないが、影分身はその者の力しだいでは50人にも100人にも分身を作り出すことができる。

九尾の力・・・昔、ナルトが赤子のころ、九尾をその体に封印される。これにより、ナルトの感情が高まった時に時折、封印が解除される。後に、コントロールが多少できるようになる。

『NARUTO 編』 ナンバー 3 : ”私”の戦い！！

絶体絶命に陥ってしまったナルト。鬼人、再不斬の前に
手も足も出ずに、今、死への旅を歩もうとしている。それを信じら
れず、

目に涙をいっぱい溜め、必死に考える佐奈。

「（こんなの、こんなの・・・ひ、酷いよ！
どうにかしなくちゃ・・・ナルト君を、助けなきゃ・・・！
でも、私じゃ・・・何も、できない・・・っ）」

何もできない自分を恥じる佐奈。不思議と、「恐怖」という感情は
生まれなかった。何処か、佐奈自身もこの世界が「夢」と信じてる
のかもしれない。

しかし、佐奈の頭にふと、あることがひらめく。

「（っ！！・・・あ、あつた・・・。。。
私だけ・・・私だけができる、攻撃が・・・！！）」

気づく、佐奈。すでにナルトの処刑は、目の前に迫ってきている。
佐奈は意を決して、再不斬の前に姿を現す。そして、佐奈の考える
攻撃をするのである。

「も、桃地・・・桃地再不斬っ！！」

「・・・あア？またガキか・・・。」

「つぐう！・・・オ、オカム、ラ・・・！！
に、逃げる・・・！！」

「（そうっ！私だけが、知ってる！彼らが漫画の世界でしてきたこと！」

彼らの未来、彼らの過去もっ！）」

突然、現れた佐奈に、意識をナルトから佐奈に移す再不斬。振り下ろそうとする

大剣を一度降ろし、佐奈の方を見る。

「……ほオ。俺の名前を……」

「桃地再不斬っ！血霧ちぎりの里で生まれて、そこで100人を超える仲間を卒業試験のために殺したっ！」

「……それが、どう……」

「そしてアナタは、白はくという少年を引き取る！アナタの武器とするために！」

「っ！！……こ、この女……なぜ、それを……！」

「それだけじゃない！今、アナタは、ガトーという男にたのまれてタズナというオジイちゃんを暗殺しようとしている！」

「（バカなっ！なぜこのガキが俺の任務を知っている……！？情報がもれたのか？白の野郎がミスをしたのか……！？）き、貴様……何者だ……！」

「わ……私は……ちょ、超能力者なのよっ！み、みんなの未来なんて、簡単にわかつちゃうんだから！」

彼女の武器、それはナルトや再不斬の未来を知っているということ。極秘任務をペラペラと喋られたため、焦る再不斬。そして、彼の脳裏にも

とある疑問が生まれている。本当に、「超能力者」ではないのかと・・。

「・・・だから・・・どうだって言いやがる・・・!!」

「こ、この町は、あとちょっとで崩壊しちゃうわ!

だから、今は争っている場合じゃない!今は、引いて・・・おねがいっ!」

「・・・超能力者、だと・・・?」

ならば、一つ、質問しようじゃねエか。当ててみる、俺の年をよオ・・・」

「え、ええ!? (い、今までうる覚えでごまかして言ってきたけど・・・・。

ど、どーしよあ・・・!再不斬の年齢なんて、漫画に出てきてないよオ!)」

「・・・答えられないのか・・・?」

「・・・さ・・・34っ!!!!」

再不斬は尋ねる。自分の年齢を。当然、佐奈は再不斬の年など知るよしも

無い。しかし、ここで答えなければナルトは殺されてしまう。恐らく、自分自身も。

数秒間、沈黙が辺りを包む。

「……………ツクツクツク……………34、か……………」

「っ!!!(は……………はずしちゃ……………った……………!?)」

「……………崩壊、するんだな?この町が……………」

「ツチ、すでにここは敵の罠かもしれないねエ。ここは退くとするか……………」

「あ、え、その……………う、うん!!だから、早く逃げなきゃ!

(わ、私の推測、当たってたんだ!)」

再不斬は手に持っていた大剣をゆっくりとしまつ。どうやら、佐奈の推測は当たっていたようだ。その場から立ち去ろうとする再不斬だが……………。

「……………一つ、言っておこうか……………」

俺の年齢など、もう俺自身が覚えてねエってな……………」

「え!?!」

「……………俺が見たのは、テメエの目だ……………」

「真実を語ろうとする目が、見ただけだ……………。今日の所は見逃してやる。」

「せいぜい、生き延びることだな。超能力者さんよ……………!」

「(……………う、嘘……………バレてたんだ……………)」

そう言うと、再不斬は颯爽と何処かへと去ってしまった。再不斬が

消えたのを確認すると、震える足を押さえて、急いでナルトのもとへ駆け寄る佐奈。

「ナ、ナルト君！大丈夫！？（あつ・・・クナイで刺された足が、もう

治ってきてる。そっか、ナルト君は九尾の力で・・・）」

「ぐ・・・ぐやじい・・・。」

「え？・・・ど、どうしたの、ナルト君」

「ぐやじい・・・ってばよぉ！！・・・オレ、オレエ・・・！！！」

まだ、やつぱし、全然・・・弱いってのかよぉ・・・！！」

「ナ、ナルト君・・・。」

自分の情けなさに、涙を流してくやしがるナルト。気づけば、ナルト自身は
再不斬に傷をつけることもできなかった。けれども、無理はないのだ。

今のナルトの実力では、仕方が無いのだ。佐奈は、ナルトの背中をさする。

「・・・大丈夫だよ、ナルト君。きっと、ナルト君は立派な火影になれるよ。きっと・・・。」

「・・・う、うぐう・・・！！ゼッテェに・・・ゼッテェに！！・・・あのマユ無しを・・・倒してやるってばよぉ！！！」

「・・・倒せるよ、ナルト君なら。（随分、かかると思っけど・・・）」

こうして、再不斬との戦闘を乗り切った佐奈とナルトは、再び歩き出す。

もう、ラーメン屋だのどうだの言っている場合では無かった。とにかく、

この町を出たかったのだ。

「おおっ！！オカムラ、あそこに砂漠が見えるってばよっ！

やっと、出口が見えたア！」

「ほ、本当だっ！！やったね、ナルト君っ！」

「ああっ！！・・・むっ、そーいえば、オカムラはこれからどーすんだ？

オレはとりあえず、ラーメン屋とマユ無しを探す旅に出るけどよオ」

「（そ、そういえば、私、これからどうすれば良いんだろう・・・。。

でも、もしかしたら、ナルト君以外にも漫画の人達に会えるかもっ！）」

「・・・？どうしたんだ、オカムラ」

「・・・わ、私も、ナルト君と一緒にいくっ」

「おお！そうか、そうか！んじゃ、これからよろしくたのむぜ、オ

カムラ！」

「うん!!」

ナルトと佐奈は、固い握手を交わす。そして、佐奈はナルトと共に、この世界の真実を知るために、旅立つのである……。

「あつ、それとナルト君。もう、名字で呼ばないでね」

「え？」

果たして、佐奈とナルトは様々な漫画が混同する世界で生き延びることができるのであるうか。そして、もう一人、この世界にいるはずの

鈴木宗司はどうなってしまったのだろうか。

そのころ……。

「……此処は、どこだ……？」

俺の名……駄目だ、思い出せん……。無駄、無駄か……」

TO BE CONTINUED ↓

〈NARUTO編〉 ナンバー3：“私”の戦い！！（後書き）

〈用語説明〉

白^{はく}・・・再不斬に付き添う抜け忍。高い素質を持っており、自分を引き取ってくれた再不斬を心から慕っている。ちなみに、ナルト曰く「サクラちゃんよりカワイイ」のに、男である。

ガトー・・・海運会社の大富豪。しかし、裏では麻薬などの違法行為を平気で行う。そこで、邪魔になったタズナの暗殺を、再不斬に依頼する。

タズナ・・・橋作りの名人、らしい。見た目はただのじじいだが、その腕前は中々のようだ。カカシ班の、初の護衛任務の依頼人。

再不斬の年齢・・・とりあえず、26歳らしい。これを若いと見るか、老けていると見るかは、個人の自由である。

ベルセルク編 捕らわれた鬼（1）

鈴木宗司^{すずき そうじ}は、迷っていた。岡村佐奈と共に、別の世界へと来てしまった

宗司。その経緯はまるでわからない。自分が現実世界で何をして、なぜ、

こうなったのかも思い出すことができなかったのだ。しかし、今はそれよりも……。

「ヘッヘッへ。こりゃあ、良いぜ。世にも珍しいエルフの的当てだっ！」

「うぐう！！は、離せよお！な、なんでまた、どこかでみたような展開に……。」

宗司はとある喫茶にいた。宗司が意識を取り戻した場所は、とある村の

隅っこ。初めはあまりの光景に開いた口が開かなかったが、これをすべて

「夢」と解釈することで、何とか今の状態に至っていた。だが、今の宗司の目の前に

広がる光景は、ナイフの的当てにされそうになっている妖精の姿だった。

「（……じよ、冗談、だろ……！！？

あ、あの妖精……お、俺……知ってる……。」

で、でも、あれは、漫画のキャラクターだし！」

「こらっ！！動くんじゃないぞ！」

「ふ、ふざけんなっ！当たったら、いっぱい血が出るじゃねーかつ！エルフをもっと敬いやがれーっ！」

「ツチ、うるせえ害虫だな。一発で仕留めてやる……！」

そのエルフを知っている宗司。だが、その存在を認めることができなかった。

薄汚い中年の男のボーガンの的になろうとしている妖精。冷や汗をかきながら、宗司は妖精の姿をバーカウンターからチラ見する。

「（ど、どうか知らない世界に来たと思えば……
今度は漫画のキャラクターのご登場かよぉ……！
俺、夢に出るまで漫画を想像していたのかぁ？）」

「だ、誰かーっ！誰か、助けてくれえー！」

「っへっへ。誰も助けてやくんねーよ。バカなエルフだぜ。
ほおーら、狙いが定まったぜえ」

「（や、やべえよ！！いくら夢だからって、見殺しにするなんて縁起が悪いし……ん？……夢……？
そ、そうか、これ夢じゃん！なら、いくら無茶しても大丈夫なハズっ！）」

この世界を「夢」だと信じ込む宗司の目に、もう迷いは無かった。夢ならば、すべてがうまくいく、そう思った。ボーガンを持った男は、妖精に狙いを定めた。

「へーへっへ！死ねよお！！」

「っ！！だ、誰か……誰か、助け……っ」

「あ……あんなところに、裸のおねーちゃんが踊り狂ってるぞ
おお！！」

「な、何いいい！！何処だあ！？」

「っ！！（こ、この声は……）」

宗司は、大声で嘘をつく。喫茶店にいた男性達は宗司の指差す方向を一斉に見つめる。その間に、宗司は急いで妖精を助け出し、逃げようとしていた。

「さ、さあ！はやく逃げよう、パック！」

「はエ？な、なんでオレの名前を……」

「い、いいからっ！！早くっ！！」

雷の如く、パックを助け出し喫茶店から逃げ出す宗司。妖精の名は、パック。

それを、宗司は知っていた。そう、宗司の知っている漫画のキャラクターだからこそ。

少し走って、森の影で一休みする宗司とパック。

「あ、あんがと！！なんでオレの名前を知ってるかわかんないけど、ニイちゃん、良い奴なんだねっ！」

「……うん……。（やっぱり、パックだ……。
ってことは、やっぱり……。やっぱり……。!!
ここは、ベルセルクの世界だ!!）」

宗司の推測は正しかった。ここは「ベルセルクBERSEK」という漫画の世界。

しかし、宗司には一つ、気がかりなことがあった。それも当然である。肝心の、主人公がいないのだ。パックは仮にも、主人公の付き妖精である。

「な、なあ、パック。ガッツはどうしたんだ？もしかして、
今現在、使徒しとと戦っているとか……」

「二、ニイちゃん、ガッツのこと知ってるの？すつげえー!!
ニイちゃん、何でも知ってるんだねっ」

「えっ？って、ゆうか、その、なんとういか……。ま、まあな。俺、凄い奴だから……。そ、それより！」

「う、うん……。それが……。ガッツの奴、キャス力を取り
戻すために

あの王国に乗り込んだんだけど、運悪く捕まっちゃったんだ……
」

「（っ、捕まったのか、ガッツ……。）。
王国って、ここから見えるあの城？」

「うん。あのバカ、いつも無茶ばかりするからなあ……」

ベルセルクの漫画の主人公、その名をガッツ。復讐に身をゆだねた男、黒い剣士、ガッツ。つねに、運命と戦う者である。そのガッツが守るべき者、かつての仲間であり恋人のキャスカが誘拐されたようだ。それを取り戻そうとしたガッツだが、逆に捕まってしまったということだった。

「（キャスカと一緒に、ということはモズグス戦の後ってことかな・・・。確か、このころのガッツはパックとキャスカの3人で旅をしていたハズ）」

「ね、ねえ！ 凄いニイちゃん！ 頼みがあるんだっ」

「うえ？ す、凄いニイちゃん？・・・ツフ、なんだい、パツク？」

「ガッツの奴を助け出して欲しいんだっ！ キャスカもきつと、あの城の中にいると思うし・・・凄いいニイちゃんなら、きつと何とかできるよね！？」

「ええ！？（つて、言われてもなあ・・・。ガッツを助けるつつても、

あの気性の荒いガッツを助け出した所で、俺が怪しいだの何だの言われて、

切り殺されそうな気がするんだが・・・。）」

「ど、どうなの、凄いニイちゃん！？」

狂戦士、ガッツ。主人公とはいえ、彼の鬼のような性格は、常人である宗司を

受け入れるのだろうかと心配する。それに、ガッツでも侵入に失敗した城に

忍びこむと考えると、不安はつのる一方だった。

「……………んー……………。（でも、所詮は夢だし……………

ガッツに会えるんなら、悪い気もしないなあ）」

「……………だ……………ダメ……………かな……………?」

「……………よしっ。やってみるか、ガッツ救出大作戦!!
頑張ろうぜ、パック」

「っ!!……………う、うん!!」

こうして、城に捕えられたガッツを救出すべく動き出した宗司とパック。

果たして、二人はガッツとキャス力を城内から助け出すことができるのだろうか……………。

くベルセルク編く 捕らわれた鬼（1）（後書き）

く用語説明く

パツク・・・大人の手の平サイズの妖精。ひょんなことから、ガッツと共に旅することに。人の傷を癒す力がある。ちなみに、”アレ”は無いが、男らしい。

ベルセルク・・・作品名だが、意味は「狂戦士」

ガッツ・・・「ベルセルク」の主人公。とある戦いで、右目・左腕、そして友を失う。現在はとある男を倒すべく旅をしている。左腕は義手で、その義手には砲弾が仕込んである。ちなみに、20代。

使徒・・・選ばれし人間が、儀式を通じて力を得た姿。容姿だけを見れば「化け物」である。複数に存在していて、使徒となる人間は子供から老人まで様々。

キャスカ・・・ガッツの恋人。だが、とある事件をきっかけに、精神に異常をきたす。今は頭脳は赤子並み、言葉も喋れない。しかし、ガッツはそれでもキャスカを救おうと、共に旅をする。

黒い剣士・・・ガッツのまとう物がすべて黒に統一されることから、使徒にそう呼ばれるようになる。

モズグス戦・・・使徒の一人。人間体では宗教団体の長。ガッツによって倒される。

ベルセルク編　捕らわれた鬼（2）

ベルセルクの主人公、ガッツを救うべく城に忍び込むこととなった宗司と

妖精のパック。空は漆黒の色を示している。二人は、この時を待っていた。

夜ほど、侵入するのに適した環境はない。

「あ、あつた！！この穴だよ、凄い二イちゃん！」

「・・・や、やっぱり、凄い二イちゃんっての止めてくれ。心が痛くなる。」

俺の名前は宗司。それと・・・この穴、何処に繋がってるんだ？」

「確か、ガッツと侵入した時は便器に繋がってたよ、ソッチー！」

「・・・べ、便器ねえ・・・。（あえて、ソッチーというアダ名には

ツッコまないけど）」

仕方なく、あたり一面暗闇の中、便器に通じる穴へ突入する宗司とパックだが、

そのあまりにも汚染された場所は、強烈な悪臭を放っていた。口を開くこと、

息をすることさえ、何かに感染されるのかと思うくらいの刺激臭。そんな中を

辿っていく宗司とパック。ようやく、城の便器に到達するが・・・。

「ぷはあああー!!し、死ぬかと思ったあ……!!
ま、まさか、臭いで死にそうになるとはな……」

「こ、こつちだよ、ソッチー!ここは城の一階のハズだから、
ガッツがいる牢屋は地下一階なんだっ」

「わ、わかった!（つてか、妖精が便器の中を通るって……
夢ブチ壊しじゃないか?）」

いらぬツツコミを入れながらも、パツクの誘導どおりに城の地下を
目指して

走り出す宗司とパツク。無論、城の兵隊達が見張り役についている。
その包囲網をかくぐって、地下に行かなければいけないのだ。

「あつ、あつたよ、ソッチー!あそこが、地下の扉だ!」

「はあ、はあ、はあ……ちょ、ちょっと待てよあ……!!
（や、野郎……飛べると思って、メチャクチャに走らせやが
って……!）」

「ああ!!……う、うう……やっぱり、見張り役の兵隊が
二人いるよあ。」

どうしよう、ソッチー……」

「む、むう……。 （待てよ、ここはつまり俺の夢の中。イコー
ル漫画の世界だよな。」

ってことは、敵の兵隊はきっとバカに違いない!所詮、脇役だか
らなあ……。!）」

「な、なんか、良い案があるの?ソッチー」

「……あの手で……やってみるか……!」

宗司の言うことにも、確かに理はあった。漫画の中の敵兵隊というものは、

考えてみれば浅はかな連中が多い。悪党になりきれないというか、その

中途半端な所を、主人公に騙されたり、負けたりするのだ。そして、宗司が

思いついた「案」とは……!

「……あーっ!! あんな所に、ボインのネーチャンが素ッ裸で歩いてるぞおーっ!!」

……

「へへっ(どうだっ!!これで、敵の兵隊は慌てて捜しに……)

」

「て、敵だあー!! 捕まえろおー!!」

「な……なにいい!!?」

浅はかだったのは、まぎれもなく宗司だった。確かに、ギャク漫画ならば

通じたかもしれないが、あくまでここは「BERSERK」の世界。洒落が通じない世界だと、

宗司自身が、よく知っているハズだった。

「な、な、何で見ないんだよおー!! (お、俺でも、きっとチラ

見ぐらいは

すんのにつ！）」

「そ、そんなの通じるハズないよ、ソッチー！！……ま、まあ、すぐに斬りかかるガッツよりはマシだけど……」

「こつちだあ！！侵入者はこつちに逃げたぞお！！」

「わ、わ、わああ！！どっからあんなにワキ出てくんだよお！！
4、50人は簡単にいるぞ！」

「……あっ！！ソッチー、あれ見て！地下の扉の見張り役が、いなくなってる！」

「ほ、本当だ！……け、結果オーライってやつだ、行くぞ、パツク！」

次から次へと絶え間なく出てくる敵兵。宗司達を追う兵隊の数はすでに、

100を超えようとしていた。そんな中、さっきまで見張り役がいた地下の

扉がガラ空きになっていることに気づく。恐らく、見張り役の二人は侵入者を報告しに

行ったのだろう。それを見逃さずに、すかさず地下の扉に駆け込む二人。

「ウオオオオオ！！待てえーっ！！」

「ひ、ひいひい！！ど、どうすんだよ、パツク！！」

もし地下にガッツがいなかったら、俺達……」

「・・・うん・・・でも、ガッツがいたら・・・大丈夫、でしょ？」

「・・・ま、まあ、な・・・。（100人斬りの、ガッツ・・・！！）」

そう、たとえ普通の人間が切り抜けられない絶望の状況でも・・・
ガッツが・・・ガッツがいれば、何とかなるかもしれない・・・
（！！）」

「ガッツ」にすべての希望を託す宗司とパック。二人には、戦う術は無い。

捕まってしまうば、そこでEND。生きるとはまず、できない。
けれども、
ガッツがいれば。そう考えて、死に物狂いで走る宗司。すると・・・。

「弓・・・放てえーっ！！！」

「っ！！ソ、ソッチー、危ない！！弓が・・・！！」

「え・・・？」

グザッ

「ぐああああああ！！か、肩が・・・肩がああ！！
肩が弓に刺さったああ！！」

「ソ、ソッチー、落ち着いて！！日本語がメチャクチャだよ！！」

それは、まさに稲妻が落ちたような痛み。宗司の右肩に、弓が一本貫通する。

じよじよに血が服ににじんで広がっていく。痛みで、宗司の体からは大量の汗と共に、
まともに真っ直ぐに走ることもできなくなっていく。

「くはあ、はあ、はあ、はあ……い、痛い……い、痛い、痛い、痛い……これ……夢じゃ……」

夢じゃ、無いのかよ……!」

「ソ、ソツチー、もつと早く……早く、走って!もう兵隊が目の前で来てるんだよ……!」

「ウオオオオオオオオオオオ……!」

「む、無理だ……やっぱり、無理だ……い、痛い……痛えよ……!」

もう、走れない!俺は、もう走れない……!」

「そ、そんな……ソツチー……ダメだよ、ガッツの所まで……」

「パツク……!例えばガッツでも、あの数の兵隊を相手にして勝てるわけがない!

人間じゃ……常識的に考えて、勝てちゃいけないんだよ……!」

「……でも……でも……!」

それでもオレは……ガッツを信じる……!」

黒い剣士・・・烙印の男・・・強いガッツを、オレは信じるっ！」

あまりの痛みで弱気になる宗司。初めて味わう苦痛。日常生活で弓に攻撃されるなどあるワケがない。だが、そんな弱気な宗司をパックが一喝する。

宗司は半泣き状態になりながら、止まりそうになった足をまた動かしていく。

「・・・う、うう・・・痛え・・・痛えよ・・・」
走って・・・やる・・・！！絶対に、ガッツのところまで・・・！！！」

「・・・うん！！」

「いたぞっ！！見えたっ！！人数は一人だっ！」

「い、いけない、ソッチー！もう奴等はすぐ近くに・・・」

「パック！！後ろを見るなあ！前を・・・前を、見る！！
牢獄が・・・見えたっ！！」

もう、兵隊と宗司達の距離は20mを切った。足音が宗司の恐怖心を増幅

させていく。だが、その度に歯をくいしばって必死に走る続ける。そして・・・

「パック！！おまえは鍵だっ、牢屋の鍵を開けるんだ！オレは、ガッツの武器・・・あの太剣を持つてくる！」

「わ、わかった!!」

もう、敵兵は目の前。そのさなか、ようやくガッツの入っている牢屋を

発見することに成功する。ガッツの姿は確認できないが、宗司は信じた。

ガッツがいるのだと。そして、そばに置かれたガッツの武器。大剣「ドラゴン殺し」を取ろうとするが……。

「こ、これが……ガッツの剣……ドラゴン、殺し……!!」

（それは剣と言うにはあまりにも大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして

大雑把すぎた。それは正に、鉄塊だった……!）」

「ウオオオオオ!! いたぞお!! 追い詰めたあ!!」

「や、やばいつ!! パックうー!!」

「……ひ、開いたっ!! ソッチー、ガッツの剣を投げて、早く!!」

「わ、わかった!!……つぐう!! お、重ええ……!!」

宗司はガッツの「ドラゴン殺し」を、パックは牢屋の鍵を解くことに成功。

だが、もう敵兵は10m前後。急いで宗司は、パックのもとへ剣を投げようと

するが、できない。あまりの重さと、肩のケガで、剣が投げられな

かった。

「ソツチー！！早く、早くっ！！もう、時間がないよぉ！！」

「ぐ、ぐそぉ！！こ、このバカ剣……！！も、もち……上
がり……やがれえ！！」

「ソ、ソツチいいーーーー！！」

「いたぞぉおお！！攻撃を開始しろぉ！！」

「……ぐ、ぐそぉおおーーーー！！ガ、ガッ……
ガッツーーーーっ！！受け取れええーーーー！！」

火事場のバカ力とも言うのだろうか、最後の最後。宗司は体全身の
力を使って、牢屋の入り口へと剣を投げる。すると、牢屋の中から、
何か黒い物体が、ゆっくりと出てくる。

「はぁ、はぁ、はぁ……や、やったぜえ……」

「切り殺せええーーーー！！」

「ソ、ソツチー！！危ないっ！！」

「え？（あっ……オレ……し、死……）」

ザバァアアア！！

それは風だった。宗司の目の前に、大きな風が吹いた。それ共に、
宗司の頬に、生暖かい液体が付着する。目の前には、胴体真っ二つ

となった

兵隊が。そして、風を作った張本人、黒い暴風が、今、動き出す・
・！

「ひ、ひいいい！！や、やつが……やつが……復活した
あー！！！」

「……久々に、100人斬りの記録塗り替えと行こうじゃないか」

ベルセルク編 捕らわれた鬼（２）（後書き）

（用語説明）

すぐに斬りかかるガッツ・・・彼の気性の荒い性格を現す一言でもある。しかし、彼はつねに「狙われる存在」であり、仕方なくもそうなってしまうのかもしれない。

１００人斬りのガッツ・・・恋人のキャスカと二人きりの中、１００人の敵に囲まれる。ガッツは、キャスカを逃がすために、１００人斬りを強いられることとなったのだ。

烙印の男・・・この男とは、ガッツを示している。首筋に、「生贄」の烙印を持っている。「使徒」と一定の距離に近づくと、その烙印から血が垂れてくる。

ドラゴン殺し・・・その名の通り、ドラゴンを殺すためにと、半ば洒落に作られた剣。だが、使徒という「怪物」を相手にするガッツはこの剣を気に入り、以後、愛用している。

ベルセルク編 捕らわれた鬼(3)

それは、まさしく「鬼人」とも「悪魔」とも例えることができた。さきほどまで、

自分の命を蝕んでいた兵隊達が、まるで、そう、人形。人形のように、次々と

真つ二つに、壊れたおもちゃのようになって朽ちていく。

「うううおおおおおっ!!」

「ぐぎゃあああ!!」

ガッツのうなり声と共に、大剣「ドラゴン殺し」が100を超えていた兵隊を

まとめて切り殺していく。あまりの強さ、それは「虐め」なのか。相手を

いたわりなくなるほどの、圧倒的さ。気が付けば、兵隊の数は手で数える程度。

地下は、血の臭いと、剣の摩擦のこげた臭いで充満する。

「だ、ダメだっ！我々だけではこの男を止められない!!
い、今は逃げるぞ!!」

「ひ、ひい!! た、助けてくれえー!!」

「……ツチ……もうお終いかよ。久々に、人間と戦えたつてのによお」

ガッツが兵隊達を全滅状態に陥れるのに、10分とかからなかった。

残りの兵隊は、泣きべそをかいて逃げていく。ガッツは、戦いに区切りが

ついたのを確認すると、ゆっくりとある男に目を向ける。

「……………んで、テメエは誰だよ……………」

「……………えっ、あつ、そ、その……………お、俺は……………
お、俺はあ……………！（み、味方……………ガッツは、味方なんだ……………！）

なのに、何なんだ！？この、寒気は？この、恐怖は……………！！）

」

「……………答えしだいによっちゃ、斬るぜ……………」

「あつ、ああ……………その……………！！」

「ガ、ガッツー！！このバカー！ガッツを助けてくれた恩人に
なんちゅーことを言っただよお！感謝しろよ、感謝を！」

「ああ？……………恩人、だと」

実際にガッツを前にして、宗司は何もできなかった。漫画で見るのとは

まったく別次元。あまりの恐ろしさに、震えることしかできなかった。

しかし、パックが宗司のことをガッツに説明してくれる。

「だ・か・ら！ソッチーはガッツの救出に手を貸してくれたんだ！
悪い奴じゃないよ！」

「……確かに、使徒じゃ無エらしが……。
俺の名を知ってるあたり、どうにも悪い方にしか考えられねえんだがな」

「……え、えつと……そ、その……俺……!!
お、俺！鈴木宗司って言います！ガ、ガッツさんの……ファ、
ファンって言っか、

応援する者っていうか……。」

「ああ？……何言っただ、オマエ。どうにも怪しいな。
俺には、猫被ってるようにしか見えねえ」

「（な、何て言えば、信じてもらえるんだ！？このままじゃ、ガッツに

殺されちまうよ！ど、どうしよう！？どうしようっ！！）」

「……ッケ。ま、俺の命を助けてくれたことに変わりねーけどな。

見逃してやる、もう俺にはついてくるな……行くぞ、パツク
！」

「え、ええ！？ま、待ってよ、ガッツ！！」

そう言うと、ガッツはパツクと共に何処かへと行ってしまふ。一人、
取り残される
宗司。ガッツの威圧感に、何も出来なかった自分を恥じる。肩の痛
みなど、
忘れるくらいに。

「（……な、何やってんだよ……俺……。」

ガッツに、ガッツに会いたかったんだろ？．．．．なら．．．．迷うこと．．．．ないじゃないか．．．．俺は、俺はあ．．．．
．．．！）」

宗司は、立ち上がり、走り出す。自分が憧れた漫画の主人公、ガッツに自分を見出すために。そのころ、ガッツとパツクは城内を走り回っていた。

「だ、だから、ソッチーに．．．！！」

「．．．言っただろ、あいつは信用できねえ．．．！！
それに、例えば本当に善意だけで俺を救ってくれたとしても．．．
ッケ．．．あんな雑魚．．．足手まといなんだよ．．．
！」

「ガ、ガッツ．．．。そ、それより、ガッツは一体何処に向か
つてるんだよ！」

「．．．この城の王を襲う！！そこで、キャスカを取り戻す．．
．．！」

ガッツの目的は、あくまで「キャスカ」ただ一人。キャスカさえ取り戻せば、

もう後のことなどどうでも良いのだ。ガッツは王を人質に取るために、

城内を駆け巡る。すると．．．。

「はあ、はあ、はあ．．．ガ、ガッツさん．．．！！」

「ん？・・・ツチ、またおまえかよ・・・。
言ったハズだ、ついてくるな、と・・・わかってんだろっな
？」

「・・・俺は・・・俺は、鈴木宗司！！ガッツさん・・・
あなたに会うために、俺はここまで来たんです！！」

「・・・やっぱりデメエ・・・！！」

「ま、待って、ガッツ！！何か周りの様子がおかしいよ！」

「何・・・っ！！」

追いついてきた宗司。だが、危険はすでにガッツ達に忍び寄っていた。
それに初めに気づいたのはパックであった。何かがうごめく音が、
ガッツ達の辺りを包む。

『ガッツ君。まずは、牢屋を抜け出せて、おめでとっ』

「っ！！この声・・・機械・・・！？何処にいやがるっ！」

「（こ、これは、スピーカーからの声だっ！バカな！！ベルセルクの
世界に、

スピーカーなんて近代的な機械なんて・・・！）」

『キャス力という女性を探しているのだね？ガッツ君』

「き、貴様・・・キャス力を・・・キャス力を、返しやがれええ
！！」

『ツクツクツク。そうだね、ガッツ君。なら、ちょっと、ギャンブルをしようか?』

「な、何……!!」

それはまさしく、スピーカーから聞こえてくる音声。それは、有り得ないことだった。

ベルセルクは中世を舞台にした漫画。スピーカーなどの機械は発達していない
ハズなのだ。困惑する宗司、そんな中ガッツは、怒りに任せ、返事を即答する。

「……なめやがつて……ふざけんなっ!!ギャンブルなんて……」

『……するのかい?ガッツ君』

「……ツチ!!……やって、やろっじゃねえか……!!」

『ツクツクツク。それだよ、ガッツ君。ようやく、楽しくなってきた。』

ルールは簡単だ。数秒後、天井からコインが落ちてくる。それを表か、裏か。

『当てるというギャンブルだよ』

「……裏だっ!!さっさとギャンブルだの何だの始めやがれ……!!」

『ツクツクツク。表は人の絵、裏は動物の絵というのを付け足しておくよ。』

さあ、では勝負といこうか……」

「ガ、ガッツ！！何やってんだよ、ギャンブルなんて……！」

「うるせえ！！……うるせえんだよ……！！」

キャスカの……キャスカの、ためなら……！」

「ガ、ガッツ……」

突然、ギャンブルを申し込まれたガッツ。コインの表裏を当てるというギャンブルだが、ガッツはそれに受けて立つ。キャスカのことが、1でもわかるのならば。

そう思つて。すると、コインが天井から降りてくる。

「あつ！ガ、ガッツさん、パツク！天井からコインが……」

キンッ！！

「か、回転が……止まるっ！ガ、ガッツさん！！

コインの表示は……コインの表示は……！」

「……早く、言いやがれ……！！」

「……お、表、だ……」

コインは「表」を指した。ガッツの敗北。しかし、これで敗北したからと言って、

一体何になるというのだろう。結局、この城内を探していればキヤス力を見つけることはできるハズ。しかし、その希望は費やされるのであった……。

『ツクツクツク。ワシの勝ちだね、ガッツ君』

「それが、どうだって言いやがる……!!」

「……っ!!ガ、ガッツ!!ソウ兄ちゃん!気をつけて、床がおかし……」

ガタンッ!!

「!?!な、何……っ!!」

「へえ?う、うわああああ!!(ゆ、床があ、落とし穴になってたああ……!!」

「や、やばいい!!ガ、ガッツさんと一緒に……お、落ちるうううっ!!」

『ツクツクツク。さよなら、ガッツ君。君は、地下で一生、我が王国のために働いてもらおう……ツクツクツク……』

……

ガッツと共に、落とし穴となっていた床に落ちていく宗司。こうして、

二人は再び王国に捕まることとなった。今度は、最悪の方法で、最悪の場所です。

気が付けば、そこはまさしく地獄っ！！

人が人と思わぬ世界、人が尊厳を失う世界、そう、まさに地獄！

ガッツと宗司は、地獄へと堕ちていく……………。

ざわ…ざわ…。

続く。

ベルセルク編 捕らわれた鬼(3) (後書き)

～用語説明～

ベルセルクの世界・・・ベルセルクは、中世のヨーロッパが時代の背景になっているらしい。当然、スピーカーなどは発達していないであろう。

「ジョジョの奇妙な冒険編」 失いし者の世界 その1

漫画が混同する世界へと迷い込んだ岡村佐奈。おかむらさな「NARUTO」

という漫画の主人公、うずまきナルトと出会い、二人でこの世界を探索するために旅をすることとなった……。

現在位置、何処か見知らぬ砂漠。二人は、雲ひとつない、白く輝かしく光っている

太陽の下。その太陽が、砂漠をひたすらに歩いている二人を絶望へと導く。

汗でびっしょりとなりながらも、必死に足をひきずって歩くナルトと佐奈。

「どへえ、へえ、へえ……。な、何だつてばよ……。！
こ、この砂漠……。どこにゴールがあんだよ……。！」

「が、頑張つて、ナルト君。あとちょっとで、きっと何処か町や都市があるハズだよ」

「……。それエ、1時間前にも聞いたセリフだったの……。！」

「ハ、ハハッ……。 (つて言っても、私も限界だわ。この砂漠、
いつたい何処まで続いているの……。?) 」

歩いても、歩いても見えるのは砂。あたり一面の砂。この先には砂漠しか存在しないのか、と思えるほどの道のり。確かに、この世界をまったく理解していない二人にとって、うかつ動くのは

危険ではあったのだが。

「へえ、へえ、へえ……。ああー！ーっ！！
もう一步も動けないってばよオ！ー！」

「ナ、ナルトくん……。も、もうちょっと頑張ろうよ、ね？」

「ヤダ、ヤダ、ヤダ、ヤダってばよオ！！オレはもう動かんツ！
死ぬまですっと、ここにいろっ！」

「は、はあ……。ん？……。あれって……」

わがままを言っで、佐奈をこまらすナルト。大の字に寝転んで、歩くことを

やめてしまった。ナルトの気持ちがわからないでも無いことは、佐奈自身、わかっていた。

自分だってそうしたいのはやまやまだが、二人ともあきらめてしまつてはダメだと

言うことも、わかっていたのだ。すると、佐奈は遠くに何かを見つける。

「遠くでよく見えないけど……。なんだろ……。あれ……。？
ヤシの木……。？も、もしかして、ヤシの実とか、食べ物があるかもっ！」

ナルト君！あっちを見て、何かの木が見えるよ！」

「へえ？……。あ、ああー！！本当に、何かある！！
元氣１００倍だってばよオ、行くぞ、サナア！！」

「は、はいはい……。死ぬまでここにいるんじゃないかっただけ……」

・」

遠くからでよく見えないが、何かの木があるのを遠目で確認する二人。

急いで、その木のもとへ走り出すナルトと佐奈。さっきの弱気が嘘だったかのように、

猛烈な勢いで走り出すナルト。それを少し軽蔑した目で見守る佐奈。木の元へ

着いたナルトだが……。

「はあ、はあ、はあ……つ、着いたつてばよオ……!!」

木の実っ！木の実はどこにあるんだア……!!？」

「はあ、はあ、はあ。ナ、ナルト君……！速すぎだつてば……・！」

「木の実、木の実、木の……き、木の……！！う、う、うわあああーっ！！な、何も無いつてばよオ！！」

「あ、あら……。まっ、こんな砂漠で実なんて実るわけが無いよね」

木に到達するナルトと佐奈だったが、まぎれもなく、それはただの「木」。

実が無いことに気づくと、ナルトは悲鳴を上げて落胆する。

「し、仕方ないよ、ナルト君。でもっ、ここ木陰になるし、ちよっと涼んでこうよ」

「……オレつてば、ここで死ぬつてばよオ……」

へへッ、うずまきナルト、砂漠の中心で干しせんべいだってよ
オ……」

「ナ、ナルト君……。 (そ、そーとー、弱気になってっちゃって
るよ)」

「あーあア、最後のラーメンを一杯、食べてみたかったって……」

ドガッ

「ん？……何か、手に当たったってばよオ……。
？……っ！ー！う、うわあああー！」

「ど、どうしたの！？ナルト君！」

「ひ、ひ、ひ、人が、死んでるってばよオオオオー！」

再び、絶望感に浸るナルトと佐奈。ナルトがすべてをあきらめ、そ
こに
倒れこもつとした時、手に何かが当たった。木ではない、柔らかい
何か。

そう、そこには目をつぶったまま動かない人が倒れていた。

「し、死んでる！？ナ、ナ、ナルト君、どうしようっー！」

「う、うるたえるなっばよオー！木ノ葉の忍者は、うるたえない
ッ！」

「わ、私、忍者じゃないしっー！」

「う、うう……」

「?……い、意識があるってばよォー!!死んでないっ!
お、おいっ!こんな所で寝てたら、から揚げになっちまうぞ、起
きろって!!」

「……う、うう……こ、此処^{ココ}は……」

死んだと思われていた男性は、生きていた。いや、生きるべくして
生きていたのかもしれない。20代と見える男は、ゆっくり体を起
こす。

その男の姿を見た、佐奈は何かを感じた。

「……此処は……俺は、一体……」

「(……何だろう。私、見知らぬ人を前にこんなことを思う
のは酷いけど……」

この人の目は、凍りつくような眼差し。黄金色の頭髮。透き通る
ような白いハダ。

男とは思えない妖しい色気……い、一体、誰なの、この人・
……?)」

「おいっ!!オマエ、どこから来たってばよ!ってか、何者なんだ
よッ!」

「ナ、ナルト君!!ダメだよ、この人は今、意識を取り戻したばっ
かりで……」

「……俺は……俺は……」

佐奈は、何かを感じる。この金髪の男を前にして。ナルトはいつもと同じように、荒い対応をするが。金髪の男は、考え込む。どうやら、この男は……………。

「……………すまないな。どうやら、俺に記憶は無いらしい……………。
覚えているのは、自分の名。そして、俺の……………弱点……………。
」

「じゃ、弱点？……………弱点って、どういつこと？」

「もう、ワケがわからないってばよオ！もう何でもいいから、
覚えてることを言えってのッ」

「……………俺の名……………そう、D i o……………
ディオ・ブランド……………太陽の光を拒んだ者、だ……………」

「

く ジョジョの奇妙な冒険編 く 失いし者の世界 その1 (後書き)

く 用語説明 く

ディオ・・・本作では、記憶を失っている。見た目は20代だが、詳しいことは不明。以下、佐奈の説明通りである。彼の詳細については、後々説明されるだろう。

「ジョジョの奇妙な冒険編」 失いし者の世界 その2

砂漠を放浪するナルトと佐奈の前に、ディオ・ブランドーと名乗る男性に

偶然、出会う。彼は記憶喪失になっているらしく、自分の名前と、とあること

しか覚えていなかった。とあることは、自分の弱点。太陽の光を浴びると、

死ぬということであった。

「まったくよオ。ディオ兄ちゃんが夜中にならなきゃ歩けないっていうから、

わざわざこんな真夜中に歩いてるんだぜっ！」

「……謝罪はする。だが、別に俺は貴様らと共に歩むとは言っていないが……」

「ま、まあ、まあ。旅は道連れって奴ですよ、ディオさん。」

それに、一人よりは二人。二人よりは三人の方が良いですよっ」

「……そう、か……」

太陽の光を浴びると死んでしまうというディオのため、わざわざ夜中を

待つて行動を開始する一行。ナルトは愚痴をこぼしながら、佐奈はそんな

ナルトをなだめながら、歩いていく。

「そういえば、なんでディオさんは太陽の光を浴びると死んじゃう

んですか？

それに、よく考えれば何で記憶喪失になったとか……」

「もしかしてさっ！！ディオ兄ちゃんってば、ドラキュラだったりして！！」

「……すまない、どの質問にも適切な答えが出せない。

貴様らの疑問に思うものは全て、俺がもっとも知りたいものだ。
今はただ、わからないとしか言えない……」

「むうー。じゃア、もしかしたらディオ兄ちゃんは忍者って可能性もあるってことかア。ディオ兄ちゃん、何か術できる？」

「……術？……忍、者……？悪いな、ピンとくるものはない。

どうやら俺は、その類の者では無いらしい」

「じゃあさ、じゃあさ！！今度、俺がディオ兄ちゃんにとっておきの術を

おしえてやるってばよオ！おいろけの術って言って、きっとディオ兄ちゃんも

気に入っちゃうよ！」

「……ああ。伝授してもらおう、その術とやら。興味がある」

「だ、ダメだって、ナルト君……。ん？……あ、ああーっ！
っ！！

ナルト君、ディオさん、み、見てっ！！あそこに、光が見える！
町があるよー！！」

結局、ディオのことについては名前と、弱点。その2点しか分かることは

無かった。そんな当ての無い三人に、わずかな希望が見えた。ようやく、

砂漠の果て。建物の光が見えたのだ。

「ま、町……！！ほ、ほらっ！佐奈、ディオ兄ちゃん！何してるってばよ！！」

全速力で走るっての……！！」

「ま、待つてよ、ナルト君……！！」

「……（砂漠……この用語にはピンと来るものがあつた……。」

だが、詳しくは思い出せない。砂漠、そう、俺は……。」

「何やってるってばよオ、ディオ兄ちゃん……早く走って、走って……！！」

「……ああ」

「砂漠」という場所に何か記憶の欠片を見つけるディオ。だが、そんなこと

おかまいなしに、ナルトと佐奈は町へと向かって駆け出す。そして、三人はようやく、

砂漠の都市へと到着するのである。

「よ、ようやく……ようやく、町に着いたってばよ……！！」

「この町には、ちゃんと人がいるみたいだね。ナルト君、ディオ

さん、

まずは食事を取ろう。私、ずっと空腹で……」

「ラーメン屋を探すつてばよ!!よしつ、早速……」

「……悪いな。俺は、別行動を取らしてもらつ。この町をもう少し探索したい。それに……」

「それに……?どうしたんですか、デイトさん」

「……いや、何でもなし。またここに戻つてくる。

(……そうだ、俺も確かに空腹だ……。だが、違つ。この空腹は、炭水化物を取ることで満たされるものじゃない。俺の空腹を満たすもの、それは……)」

「じゃ、デイト兄ちゃん。ここにちゃんと集合だかなつ。迷子になつちゃダメだつてばよ。じゃ、行こうぜ、佐奈」

「う、うん!」

デイトとは別行動を取ることとなつたナルトと佐奈。ナルトと佐奈は、

とにかくラーメン屋を探しまくつた。前に再不斬と戦つた町では人っ子一人

いなかったが、この町は人で溢れかえっていた。そんなことも気にせず、

二人は飲食店へと入っていく。

「ちエ。結局、フツの飲食店かよオ。ラーメン屋が無い町なんて信じられないつてばよオ」

「ナ、ナルト君。世界をラーメン屋中心で考えるのはよそうね」

「まっ、贅沢は言つてられないけどな。さアーってと！

あんだけ歩いたんだから、たらふく飯を……」

ガシャァン！！

「ざけんじゃねえぞ、テメエ！！」

結局、ラーメン屋を探すことはできなかった二人。仕方なく、普通の飲食店で妥協することに。愚痴をこぼしながらも、ナルトが大食いへの

決意を固めたその時、何やら騒ぎが起こり出す。

「もう一回言ってみろよ、あんちゃん。俺がテメエの財布を盗もうとしただとお！？」

「……消えな。ここで逃げるなら、素直にゆるしてやる……」

「

「テメエ、なめてんじゃねえぞ！！」

「……やれやれだぜ」

それは、チンピラがふっかけたいざござであった。絡まれているのは、

黒い学生服のような服を着た身長の高い男性。その様子を怯えながらみる佐奈。

「ナ、ナルトくん。どうしよう、喧嘩だよ・・・」

「知るかったの。それよりも、早くメニューを選ぶってばよ!!
え〜っと、このハムカツ定職と大盛カレーセットとオ・・・」

喧嘩など気にせず、のんきにメニューをしらみつぶしに選ぶナルト。
だが、どうやら喧嘩の方はさらにヒートアップして・・・。

「も、もうゆるさねえぞ・・・!!もう、俺は誰にも止められねえ
!!」

へ、へへっ、わかるか?このナイフが・・・これで、テメエをブ
ッ殺してやるよ!!」

「・・・・消えな。2度は、言わねえぜ・・・・」

「このスカシ野郎があー!!!!」

「・・・・ふう。オラア!」

ナイフを持って、学ランの男に切りかかるとするチンピラ。チン
ピラは

興奮状態にあった。しかし、ここで不思議な現象が起きた。何と、
チンピラが
いきなり宙に浮き出したのだ。

「っ!?!ナ、ナルト君!!み、見て!あのチンピラみたいな人・・・
く、空中に浮いてる・・・・!!」

「忍者だって、きっと空を飛べるってばよオ!!後、とろろソバと
・・・」

「・・・ぐ、うぐう！！バ、バカ・・・な・・・！！
か、体・・・が・・・う、浮い・・・！！」

「・・・俺に関わるじゃねえ。それだけだ、あばよ・・・」

バタンツ

学ランの男は、店を去っていく。すると、突然宙に浮いていたチンピラが

地面に叩きつけられる。その光景を、目を丸くして驚く佐奈。

「す、凄い・・・！！ナルト君、今の見た？」

「チャーハンとギョーザと・・・」

「・・・あの人・・・何か、気になる！ナルト君、ちょっと来て
！！」

「うえああ！！な、何するってばよ！離せ、離してくれエー！！
オレの、オレの飯いいー！！」

学ランの男に興味を持つ佐奈。嫌がるナルトを強引に連れて、後を追う

佐奈。チンピラが宙に浮いたのはまぎれもなく、学ランの男の仕業。そこに、佐奈は何らかの考えが浮かんた。そう、もしかすると・・・。

「はあ、はあ、はあ。ど、どこに行っちゃったんだろう・・・？」

（あの力、きつと何処かの漫画の世界のキャラクターのハズつ！
でも、私が知らない漫画みたいだけど・・・）」

「んむう？あつ、デイト兄ちゃん！！数十分前ぶりだつてばよ
オ！」

「あつ、デイトさん」

学ランの男を捜している佐奈とナルトの前に現れたのは、デイト。
デイトは何か考え込んだ顔をして、二人に近づく。

「・・・随分と、迅速な食事だったな。とりあえず、俺の用件は
終わった。」

この町に、俺の探し求める記憶は無いようだ」

「そ、そうですか。そ、そーいえば、デイトさん！こっちに、
黒い服の男の人が来ませんでしたか！？」

「・・・？、いや、見ていないが」

「や、やっぱりか・・・。あの人、何者なんだろ・・・」

学ランの男を見失う佐奈。もしかしたら、デイトもまた何処かの漫
画の主人公か、
登場人物かもしれない。佐奈はしだいに、そう思い始めた。すると・
。。。

「ん？・・・デイト、デイト兄ちゃん！！危ないっ！何かが飛んでく
るってばよ！」

「っ!!……」

ガチッ

「……これは……ナイフ、か」

「す、す、すっごーい、ディオさん!!飛んできたナイフを片手で取っちゃった!!」

じゃなくて、い、一体、誰がこんなこと……!」

突然、ディオに向かってナイフが飛んでくる。どこかでみたようなナイフが。

それを片手で余裕でキャッチするディオ。ディオは、ゆっくりと投げられた

場所を見ると……。

「……その反射神経……どうやら、間違いねえようだな……」

「……貴様……そう、だ……貴様は……」

「……ようやく、見つけたぜ……D i o……!!」

「……空条ウラハ……承太郎じやうたろう……」

「(さ、さっきの学ランの人っ!!……な、何で……!?!?何でディオさん……いえ、二人とも、互いの名前を知ってるの……?)」

「ジョジョの奇妙な冒険編」 失いし者の世界 その2 （後書き）

（用語説明）

おいろけの術・・・裸の女体に変身できるという、ナルトが考え出した忍法。果たして、ディオは実践するのだろうか・・・。

砂漠・・・かつてディオは、記憶ありしころ、砂漠を拠点にしていた。なぜ、砂漠を拠点にしたのかは、原作でもおおくは語られていない。

ディオの空腹・・・ディオは人が食べる通常の食べ物には口にしない。ディオの食事とは、生命のエネルギーを蓄えるということ。つまり、その「食事」とは・・・。

「やれやれだぜ」・・・空条承太郎の、決め台詞の一言。承太郎は、どんな窮地にあっても、この一言で、何とか切り抜けようとしている。

忍者が空を浮く・・・ナルト曰く、できるそうだが、恐らく、できなくは無い、だろう。

Dio・・・ディオは、「ディオ」と「Dio」、発音は同じなのだが、二つの呼び名がされている。それは、ジョジョの第一部での悪しき人間だったころのディオ、そして第三部で帝王へと手をかけようとした化け物のDio、両方が分かれているのだろう。

空条 承太郎・・・3代目ジョジョ。普段は不良の高校生。顔立ち

は、かなり良い。ハードボイルドな性格で、冷静沈着な判断と、それに劣らない大胆さと度胸で、幾度と無く、敵を圧倒してきた。

く ジョジョの奇妙な冒険編 く 失いし者の世界 その3

三人の前に現れたのは空条承太郎くうじょうしょうたろうと名乗る体格の良い学生。

彼は、記憶喪失のディオについて知っているらしい。どうやら、彼の対応を見ただけでは、

どうもディオに良い感情は持っていない、いや、それ以上の……。

「……出しな、テメエのスタンド……。」

「……貴様の顔には見覚えがある。どうやら貴様は俺の敵のようだな。」

貴様の顔を見ていると、体が躍動する……。」

「ど、どうしたの、ディオさん！？ やつぱり、あの人と何か関係があるの？」

「……そうらしい。だが一つ、不可解なことがある。」

今、奴が言っていた”スタンド”と呼ばれたものだ。聞き覚えはあるのだが、

やはり思いだせん」

ディオと空条承太郎。彼らは長きに渡る因縁の関係にあつた。そう、彼らの

血族、祖先の代からの因縁が。だが、何もかも忘れてしまったディオにとっては

今の状況が把握できていなかった。すると、突然ナルトが前に歩み出ると……。

「やい、やい、やいッ！！いきなりナイフを投げつけくるとは

どーいうことだつてばよ！だいたい、オマエのせいでオレの食事が……！」

「……消えな。ガキはお呼びじゃねえぜ……」

「むっ！ーぐ、ぐつそオ……！デイ、ディオ兄ちゃん！
一発、ガツンとやっちゃうてばよ！」

「……ああ。わかっている。この男は、生かしておいてはいけない……」

意識ではなく、感覚で理解できる。倒すべき者をな……」

「(つていうより、ナルト君は戦わないの……?)」

佐奈は、まだ知らない。いや、知っていれば、もっと複雑なことになるかもしれない。

ディオ・ブランドーという男が、どういう者かを。彼が今までに何をしてきたか、を。

承太郎はゆつくりとディオに近づいてくる。

「……ほお。この距離でもまだテメエのスタンドを出さねえのか……」

どうやら、俺とオマエのスタンド……射程距離は同じ、近距離型ってワケか……」

「ちょ、ちょっと、待ってください！！え、え……く、空条さん！」

ディオさんが貴方に何をしたかは知りませんが、今のディオさんには

記憶が無いんですっ！」

「っ！……記憶が、無いだと……？
ツチ、やれやれだぜ」

「そ、そうだってばよ！！だいたい、ディオ兄ちゃんが何をしたんだよー！！」

さてはオマエ、悪者だなっ！」

「……勝手にしな。俺はディオをブツ潰す……。
例え記憶が無くとも、過去にやってきた奴の罪に裁きを下すのは……

この俺だ、……俺の、”スタンド”だ……！」

「っ！（来る……）佐奈、ナルト、離れている……！」

「えっ、ディオさん……！」

承太郎は、記憶を失ったディオにも容赦はしない。彼の言い分は正しかった。

しかし、佐奈達はそれを理解しようとはしなかった。すると、ディオが何かを感じ、
佐奈とナルトを横に押す。

「……射程距離、入ったぜ……。
行くぜ、Dio……！！オラオラオラオラオラオラっ！
」

ドゴオオオー！！

「ぐううー！！（こ、これ、は……！？奴の体から、人型の魔

人が出てきた？

物体ではない感じ、これは幽霊とかの類のものか！？違う、これはまさしく

パワーある像！^{ヴィジョン}そうか、これが幽波紋か^{スタンド}……！」

D i o は、承太郎の体から出てきた幽霊のような者に、拳のラッシュを浴びせられ建物に突っ込む。そう、これがスタンド。スタンドとはスタンド使いにしか見えない。

スタンドとは生命エネルギーが作り出すパワーある像^{ヴィジョン}なのだ。

「デイ、ディオ兄ちゃんが、いきなり吹っ飛ばされた！？」

「な、何で！？空条さんは、指一本動かしていないのに……何で、ディオさんがやられちゃったの！？」

「……拍子抜けだな、D i o ……。だが、容赦しねえ……。」

「ここでケリをつけてやる」

「う……ぐ、うう……。 (な、何とパワーのあるスタンド……。」

背骨と腕、足の骨をそれぞれ数本持っていかれた、か……。だが、おかしい……。折られたハズだ、俺の骨は……。だが、そう、

じよじよに、治ってきている……。自然治癒で、それも急激な速さで……。！)」

「……覚悟しな、D i o ……！」

「い、いかん……。いくら自然治癒が速かろうと、同じ攻撃を三度受けたら、回復が間に合わず、俺は……。！」

「ディ……。ディオ兄ちゃんから、離れろってばよオー！！」

「ナ、ナルト君！？」

ディオの絶体絶命のピンチの前に現れたのは、うずまきナルト。ナルトはビビりながらも、承太郎の前に立ちふさがる。

「な、何だか知んねーけど、何もできない奴を一方的に攻撃するってのは、

卑怯だつてばよ！！そんな奴、オレはゼッターにゆるせないっ！」

「……。やれやれだぜ。ガキには手を出したく無かったが……。

どうやら、お仕置きの必要があるみてえだな……。」

「……。や、やってやるってばよ！！必殺、影分身の術！！」

「っ！！（な、何だ！？ガキの体が無数に増えた……。！
これが、奴のスタンドなのか……。？）」

影分身の術を使い、何十人と増えたナルトの分身。そして、増えたナルト達は、

一斉に承太郎へ向かい、駆け出す。しかし、それでも承太郎はあくまで冷静。

眉一つ動かさず、影分身したナルト達を見る。

「あいつを囲んで、袋叩きだつてばよオー！！！！」

「…………少々、手荒い真似をさせてもらっぜ…………。
オラオラオラオラオラオラオラっ!!」

ドガアアア!!

「うぐうああ!! (な、何で!? あんなにいつぱいで攻撃したのに、

全部、”何か”によって殴られたってばよ! あいつを守る、”何か”に!!」

だ、ダメだ…………つ、強すぎる…………!!」

承太郎のスタンド、通称「スタープラチナ」と呼ばれる人間型をしたスタンドは、拳のラッシュを得意とする。承太郎の「オラオラ」という掛け声と共に

パンチを繰り出す様から「オラオラのラッシュ」とも呼ばれる。影分身したナルト達は、

一人残らずパンチを浴びせられ、本体のナルトごと吹き飛ばされる。

「ナ、ナルトく……んっつ!!」

「…………さて、と。クライマックスとやらだ、D i o…………!!」

「(…………俺が、死ぬのか…………。この男のスタンドによって…………)」

「や、やめて…………やめてくださいっ!! おねがいします、空条さん!!」

「（・・・なぜだ？なぜ、俺が死ぬ？・・・何だ、この感情は・・・？」

自分が死ぬという状況なのに、・・・そうだ、怒りが沸いてくる・・・！）」

「・・・消えな、D i o・・・！」

「（これは、逆上とかの怒りではなく、この俺が人間というチツポケな存在に

生涯を立たれるという屈辱的な怒りっ！・・・俺を・・・俺を・・・

誰だと、思っている・・・（）」

「に、逃げてえー！！ディオさぁーん！！」

「（・・・そうだ、俺は・・・俺は、ディオ・ブランドー・・・！！！」

闇に生命を掲げた、邪悪の化身！帝王っ！ディオ・ブランドー！！）」

「・・・行け・・・！！オラオ・・・」

「貴様の・・・貴様の脳みそを地べたにブチまけてやるっ！！無駄、無駄ぁあー！！」

ザ
THE・WORLDっ！！」

「（何っ・・・！！これが、奴のスタンド・・・！！）」

ドガアアア！！

突然として、蘇るディオの記憶。スタンドを出せないと油断した承太郎の敗北だった。

承太郎はディオのスタンド、「ザ・ワールド」に思い切り殴られ、遠くに

吹き飛ばされる。

「……ハア、ハア、ハア……。こ、これが……。これが俺の”スタンド”……。つぐ！……。ダ、ダメか……」

記憶の復帰は一時的なものでしかないのか……」

「デイ、ディオさん！ケガは無いですか！？」

「……あ、ああ……」

「今のうちに、ナルト君を連れて逃げましょう！空条さんが戻ってこないうちに！」

「……（ここで奴とは決着を付けたい……。だが、それは愚かな考え、か。」

そろそろ日が昇る時間帯だ。ここは逃げずして勝機は掴めぬか……」

「……」

「デイ、ディオさん？」

「……。わかった。ナルトは俺が運ぶ……。即効、出るぞ……。！」

「は、はいっ！」

やはり、記憶の復帰は一時的だったディオ。佐奈とディオは、ナルトを抱え、

承太郎が戻ってこないうちに町を出て行く。結局、ディオの過去については何も

聞けなかった。が、聞けなくて良かったのかもしれない。その理由はいずれ、佐奈達にも

わかるだろう。そのころ、吹き飛ばされた承太郎は……。

「……つぐ……ツチ、やれやれ、だぜ……。」

（あれが、ディオのスタンド……。もう、油断はしねえ……。

今度こそ、奴を絶対に仕留める……。！）」

「ジョジョの奇妙な冒険編」 失いし者の世界 その3 （後書き）

（用語説明）

スタンド・・・説明は、本文中に記されている通り。だいたいのスタンドの形は人型。それぞれのスタンドに一つずつ、特殊な能力が備えられている。

因果の関係・・・承太郎の祖先、ジョナサン・ジョースター、つまりジョースター家とディオ・ブランドーとの因縁の関係を示している。世代を超え、ディオとジョースター家の戦いは続いている。

スタンドの射程距離・・・スタンドには近距離・中距離・遠距離がある。ちなみに、空条とディオのスタンドはともに、近距離型。

オラオラッ・・・承太郎が、このセリフと共に、自身のスタンド、「スタープラチナ」に、拳の連打をさせる。スタープラチナの本当の力が目覚めるまでの、必殺技。

ディオの自然治癒・・・はるか昔、ディオは太陽を拒むと共に、闇での永久の命を得た。そのため、いくら体を傷つけられても、“養分”を補給することによって急激な回復力を見せる。

ザ・ワールド・・・ディオのスタンド。承太郎と並ぶ、最強のスタンド。

賭博黙示録カイジ 第1話「奈落」

新たな出会い、そして見知らぬ世界への壮大な旅をしている佐奈とは打って変わり、

すずき そうじ鈴木宗司とガッツは、ギャンブルに負け、王国の

地下へと堕ちてしまった。次に、二人が目を覚めたのは、ほの暗い洞窟の

ような場所。二人は、まだ覚束ない意識のまま、辺りを見回す。

「い、痛てて……。こ、ここは、何処だ……。？」

確か、城の廊下に仕掛けてあった、落とし穴に落ちたまでは覚えてるけど……」

「……。ツチ。また捕まっちゃった、ってことかよ……」

「ガ、ガッツさん！（って、喜んでる場合じゃないんだよな。

ガッツさんはまだ俺を疑ってるし、それに変な場所に来ちゃったしなあ……。）」

「……。そういや……。テメエも一緒に落ちたんだっけな……。丁度良いぜ、聞きてえことが山ほどあんだ。無理やりにも、白状してもらうぜ……」

「だ、だ、だからあ！！お、俺はそのお……。！」

「っ！！誰だっ！」

ガッツと二人きりになってしまった宗司。当然、ガッツは自分のことを知っている

宗司を未だに疑っている。それをここで全て清算しようとしているのだ。そんな時、

ガッツが暗闇から、何か人の気配を感じる。

ゴソッ

「・・・二人、だな。こちらについてこい」

「ああ？何者だ、貴様・・・！！」

「・・・ついてこい。ここで暴れても、外には出れないぞ」

「・・・ツチ！」

「あ、ちょ、ちょっと！待ってくださいよ、ガッツさん！」

現れたのは、全身、黒いスーツで身を固めたサングラスの男。男は、ガッツ達を

何処かへと案内しようとしていた。事態がつかめない二人だが、この男の言うことは、事実。

だから、仕方なく付いていくしかないのだ。そして、しばらく歩いて、辿り着いた場所とは。

「・・・着いたぞ。おまえらも、この列に並べ」

「（な、なんだ、ここ！？数十人の人が、一列に並んでいる・・・！

その列の先に見える、なにか透明のプレハブ小屋のような部屋は、一体・・・！？）」

「・・・説明しな。一体、何をしようってんだ」

「・・・質問には答えられない。おまえらは黙って、列に並び、順番を待て。以上だ」

そう言うと、サングラスの男はさっきまで歩いていた道に戻ってしまふ。辿り着いた場所、

そこは人の列。暗い洞窟の中に、何十人もの人が並んでいる様子は、あまりにも異様。

そして、その列の先にある透明な部屋の中で何が行われているのかも、不明だった。

「い、一体、何が起こってるんだ？ガッツさん、わかりますか？」

「・・・知るかよ。だが、並んでいる連中らの面を眺める限りじや、

とても楽しいことが起きるわけじゃなさそうだな・・・」

「う、うーん・・・。俺達は、城の落とし穴に落ちたんだから・・・

当然、ここは城の地下のハズ。でも、城の地下で一体何を・・・

「・・・落ちてここに来たんじゃねえ。落ちて、ここに捕まったんだ・・・。

大方、この地下で強制労働でもさせる魂胆こんたんってことだな」

「そ、そんなっ！！ガッツさん！一緒に協力して、ここを抜け出しましょう！」

「……さっきの奴も言っただろう。ここで暴れても、無意味だ。こんな暗い地下の中、俺達だけでどうやって脱出する？そのルートすらも、わからない」

「じゃ、じゃあ……や、やっぱ、俺達……」

ガッツの言うことには、一理あった。右も左もわからない地下では、逃げてもどうしようもないのだ。どうしようもできない状況に、落胆を隠せない宗司。それでも表情を一切変えないガッツ。すると、ガッツ達の話聞いていたある男が、二人に話しかける。

「……な、なあ、あんたら。あんたらもいきなりここに連れてこられたのか？」

「……話しかけんな」

「ガ、ガッツさん！……お、俺でよければ、話を聞きますよ。ってか、あんたは……？」

「……俺は、カイジ。伊藤カイジ。そ、その、ギャンブルで大負けして、ここに堕ちた口なんだが……」

「ん？……カイ、ジ……？カ、カ、カイジっ！！！」

「っ！！な、なんだよっ、急に！俺の名前が、そんなに珍しいのか

よっ
」

ガッツ達の目の前に並んでいる男が、二人に話しかける。ボサボサの長い髪、とがった顎、鼻。その特徴的な顔つきに、宗司は驚いた。それはまさしく、

「賭博黙示録カイジ」の主人公、カイジだったのだ。

「（な、なんでカイジが！？・・・い、一体、何なんだ、この世界は！？」

ガッツがいたり、カイジがいたり・・・漫画の世界、とでも言うのか・・・？）」

「ま、まあ、それはそうとしてだ。あんたらに話があるんだっ。

もしかしたら、この地獄・・・薄暗い地下から出られる方法が・・・！」

「・・・言う分には構わねえぜ。まっ、聞いた後、良い答えが出るかはわからんがな」

「・・・別に今はそれでも良い。あんたらに言いたいことってのは、この地下、つまりあの透明な部屋で行われていることだっ・・・」

「ち、地下で、行われていること？（カ、カイジが絡んでくるって、ことは当然・・・”アレ”しか、ないってことだよなあ・・・）」

「・・・十中八九ってワケじゃない、だが、これは恐らく的を射ている・・・！！」

「ここでは、ギャンブルが行われている!!」

「（やっぱりか）」

そもそも「賭博黙示録カイジ」とは、だらく墮落生活を繰り返すダメ人間、カイジが生死をかけたギャンブルをこなしていく漫画。やはり、ここで行われるのはギャンブルであつた。カイジを話を聞くガッツと宗司。

ざわざわ・・・

「流れ込んできた情報だが、あの透明なボックスの中では何らかのギャンブルが行われているらしい。無論、それ以上のことは不明だがな」

「・・・賭博、ねえ。なんでこんな地下に来てまで、賭博をする必要がある?」

「恐らく、それが俺達の未来、いや生死を賭けた救済措置なんだと思う。」

勝てば地上。負ければ悪くて・・・いや、良くて強制労働。悪くて売春!ばいせん!・・・あるいは、それ以上か・・・!!」

「じよ、情報つて、それだけなのか!? カイジっ」

「いや、無いつてワケじゃない。俺の憶測、俺の考えにすぎないが・・

この列に並んでいた奴・・・俺が見た中でだが、そのギャンブルを生存、

勝利したものは・・・ゼロ・・・皆無・・・っ!!」

「・・・根拠はあんのか？」

「ここからでもボックスの中の人の表情はおぼろげながらも見える。勝負が終わるとき、笑ったり喜んだりしている奴は無しっ！皆、落胆、絶望、

奈落に落ちた顔で、奥へと連れていかれた・・・！」

カイジの言葉に、あらためて自分達の置かれている状況を思い知る二人。

そう、二人は地獄の底、もうドン底まで来ているのだ。勝つしかない。

勝たなければ、3人共、生きる資格、いや人間の資格は剥奪されてしまう。永遠に。

「・・・なるほど、な。そういうことか・・・」

「へ？な、なにが、なるほどな。なんだ？ガッツさんは何かわかったのか？」

「・・・イカサマ、ってワケだろ？つまりは」

「ああ！！ここまで一敗もせず、全勝！考えられないっ、運否天賦のギャンブルで、

一方的な勝利など、ありえないっ！そこに生まれてくる一つの答え、

それがイカサマなんだっ！だからこそ、おまえらに話しかけたんだ・・・！」

「つてことはあ……」

「……三人だっ！三人で、そのイカサマギャンブルを打ち破るっ！！」

そして、生き残る、勝つんだ！！勝つて、俺達は地上に生還する……！！」

「……だが、その賭博の題材もわからないうちは、何を考えても無駄だぜ。

三人で協力した所で……」

「フフツ、そうとは限らない。計算してみたんだが、だいたい一人につき、

終わるのが2分程度。こんな短時間のギャンブルじゃ、イカサマなんて

見抜けるのは不可能に等しいだろう」

淡々と語るカイジ。普段は、まさに墮落人間の代表とも思えるカイジ。

だが、生死を賭けたギャンブル事となると、彼は一変する。常人ではありえない

天才的発想をかもしだす。そう、追い詰められれば、追い詰められるほどに……。

「だからこそ、三人でギャンブルを挑むんだっ！三人一変が無理でも、

3人分を一人がギャンブルするっ！それでおよそ6分。2分よりはまだ

わずかだがイカサマを破る手が見えてくる」

「……確かに、聞いてる分には納得できるが……根拠がねえ」

「……ああ、確かに、無い。だけど、いちいちそんなこと考えていたら……」

俺達は、いつのまにか……売春されてるって可能性もあるんだ……。

これはもう、やるしかねえんだ……やるきる、勝ち切るしかない……!!」

「ば、売春……!!ガ、ガツツさん……ここは、カイジを信用するしかない！」

根拠は無いっ。けど、気がつかなければ、そこで終りなんだっ！」

「……ツチ。わかったよ、俺も贅沢は言ってられねえことぐらい、

承知してる」

「……よしっ!!俺達、三人……三人だっ!!」

三人で……ここを切り抜ける!!生き抜くんだっ！」

集結する、三人。こうして、三人は協力してギャンブルを勝つことを誓うのであった。

そして、順番は刻一刻と迫ってくる。

「……ん?……おいつ、カイジっての。おまえの背中やきいんの焼印……」

「あ、ああ。これは、な……。ギャンブルで負けて、あやうく海外に飛ばされそうになったんだ。そういや、あんたの首筋にも何かあるじゃないか。」

「あんたもギャンブルで負けたのか？」

「……………そう、だな。負けちまったんだ……………でつけえ、ギャンブルによお」

カイジとガッツの烙印を話し合う。カイジの背中には「21」と書かれた焼印。

ガッツには何かの紋章のような烙印。二人の指し示す烙印には、大きな違いはあるが……………。

そして、ついに、カイジ達の番が回ってくる。正確に言えば、カイジの番が回ってくる。

「次。おまえだっ。この部屋の中に入れ」

「（ついに……………ついに、俺の番が来たっ！！この部屋の中で一体、何が行われているか……………果たして、どんなギャンブルなのか……………！）」

「カ、カイジ！！たのむっ、いつものオマエなら、きっと何とかできる！！」

とにかく、最初から本気でいってくれよっ」

「……………勝ちな。どんなことをしても……………」

「……………ああ！！」

カイジの番、来る……………！カイジ、ゆっくりと透明な部屋の中へ入っていく。

中の様子は、外からでも確認できるが、音までは聞こえなかった。部屋の中に

入るカイジ。

「（うつ！！……こ、こは……！）」

「クツクツ。Good……ようこそ、地獄の扉へ……」

「（つ！！……つく……！！）」

部屋の中に入るカイジ。そこにいたのは、30代くらいの男性。

そこにはテーブルとランプらしき束が。部屋の中は、男性の真上に、チカチカと

今にも消えそうな電球が光を照らすのみ。まさに、これからカイジが堕ちていく地獄への

入り口のような、絶望的な部屋……。

「……おしろ……一体ここで、何をしているか……
！！」

「……おやおや。勝負に急ぎたい気持ちも理解はできるが、
そう焦ることも無い。まずはお互い、自己紹介するのがマナー
というもの……。

名乗らせてもらおう、ダービー……私の名は、ダービー。以後、
よろしく」

「（つく……！！）ふ、ふざけんなっ！！おまえらがここでギ
ャンブルらしき

ものをしているのはわかっているんだ！出し惜しみせずに、早く
いいやがれっ！」

「……Good……！ナイスな、観察力。うーん、ゾクゾクす

るよ・・・。

それでは、おしえよう。君はここで、私としりとりカードをして
もらおう」

「(?!...)しりとり、だと...(?!...)」

賭博黙示録カイジ 第1話「奈落」（後書き）

（用語説明）

黒服の男・・・カイジ、というよりもカイジの著者の作品に数多く出てくる人物。まさに、脇役の中の脇役。顔も体系もすべて同じ。

伊藤カイジ・・・一言、駄目人間。平穏な日常を過ごしている間は、まさにその一言。しかし、窮地に追い詰められると、一変。賭博の才能を開花させる。しかし、カイジの甘い性格のため、最後の詰めが甘くなってしまう。

カイジの焼印・・・カイジの背中、性格には左肩には「21」の焼印がある。それは、かつてカイジがギャンブルで、一度地獄に陥ってしまった時の名残である。

ガッツの烙印・・・ガッツの首筋の烙印。これは、かつての戦友につけられた、生贄の烙印である。

ダービー・・・ジョジョの奇妙な冒険の第三部に登場する、イカサマ師。ジョジョ本編では、承太郎に敗北しているが・・・。

賭博黙示録カイジ 第2話「開幕」

「し、しりとり．．．カード．．．？」

（過去に、限定ジャンケンやらワケのわからねえギャンブルをやってきたが、

今度は、しりとり．．．だと．．．！？）

「ツクツクツク。その通り、まあ、もつと詳しく言えば

ア行限定しりとりカードとでも申し上げましょうか．．．」

「（ア行．．．限定．．．！！これだっ！ここに何か、

イカサマがあるハズなんだっ！公平と見せかけた圧倒的な不公平ギャンブルっ！！

見抜く．．．何としても、見抜き、その上．．．上に行く、勝つんだっ！）」

「詳しいルールはこれをご覧下さい」

くルールく

・40枚のア行から始まって、ア行で終わる単語カードを使う。

・しりとりとゲームの仕方は同じ。デッキから5枚ずつ、相手と自分で引く。

そして、初めの一枚はデッキの上から。その一枚を初めとして、しり通りの用量で、

交互にカードを出し合う。

・テーブルに出すカードは、重ねない。カードを置いたびに、その

前の

カードを片付ける。

・カードを使い切った方が勝ち。出せるカードが無い場合は、デッキから一枚引く。

・デッキのシャッフルは交互に一回ずつ。

・一枚だけ、「ん」で終わるカードをシャッフル後のデッキ下部に入れる。

「ん」で終わるカードを引いた者は、その時点で敗北。

・イカサマをした場合は、その処罰は相手側に決められる。

渡された紙には、以下のようなことが書かれていた。カイジは、それを

隅から隅、落とし穴が無いかを用心してしっかりとチェックする。その様子を、ニヤけながら観察するダービー。

「ツクツクツク。ルールはわかっていただけたかな？」

「……………ああ……………（しりとりとルールは至って変わらない。だが、何かあるハズなんだ……………！このルールの中で、イカサマを通すために

有利なルールが！！しかし、パツと見では、まだどれも疑い深い……………

やはり、ギャンブルの最中っ！！そこが、ポイント、盲点っ！そこで、気づくしか！）」

「・・・全部で2回勝負。賭けるものは、君の命・・・」

「（うつ・・・!!）」

「・・・とは言っても、それをポイントに置き換えたもの。君は10Pの命を持っている。しかし、賭けられる数値と回数は決められている。

5P賭けが一回。10P賭けが一回。終わった時に10P残っていれば、助かる」

「っ!!な、なんだとっ!!なぜ、賭けるポイントが初めから決められているっ!そんなの、こつちにとっては不利にしか・・・」

「・・・身分をわけまえるのですね。本当ならば、こんな救命措置など

いらないハズ。しょうがなく、人の気まぐれによって、起きている奇跡なのですよ。

おまえらに決定権などもう無い・・・生きる権利も、すべてこちらの手の中・・・!」

「（つく・・・!!足元を見やがって!）・・・わ、わかった・・・」

なら、こつちにも要求があるっ!!次の二人のポイント・・・計、20P!!それをまとめて、俺が受け持つっ!」

それは、あきらかに不平等なギャンブル。つまり、初めに10P賭けて

負けてしまえばそこで終り。初めに5P賭けて勝っても、2戦目の強制的に

10P賭ける勝負に負ければそこで終り。しかし、カイジはそれを飲むしかなかった。

「……まあ、いいだろう……。そうなれば、やる回数も増えますねえ。」

ならば、全部で5回戦。その中で、10P賭けを4回。5P賭けを1回で、

30Pを使う、ということの良いかな……。？」

「ま、待てよ！そんなの、どう考えたっておかしいだろ！？
一人が2回戦なら、何で全部6回戦にならない！？」

「……そうそう時間を使っておれませんか。早急に、
地獄に行ってもらわんと……。ツクツクツク」

「つく……。！！（理不尽……。あまりにも、理不尽……。！！
どう考えたって、こっちの不利になる要求しかない……。！！
フツ……。だが、それが理になる……。！！そう、おまえが……」

・
イカサマを隠すための隠蔽の、時間稼ぎということのな……。！！
！）」

カイジ対ダービー、時来る……。！自分の未来を、人間として生きるために。

自分の未来を、ただ守るために。カイジ、この一戦に挑むっ！その様子を、

外から眺める宗司とガッツ。

「だ、大丈夫かなあ、カイジ……。」（漫画だと、追い詰められないと

カイジ、メチャクチャ弱いからなあ・・・」

「・・・ここからじゃ、様子は見えても、音は聞こえねえようだな。見る分じゃ・・・ポーカーか何かのカードを使ったギャンブルをしているようだな」

「あ、ああ・・・。カ、カイジ・・・！たのむ、何とかしてイカサマを

見破ってくれ・・・！！」

心配そうに中の様子を見守る宗司とガッツ。そんな冷静な外の様子とは反対に、部屋の中のカイジは、まさに熱かった。今まさに、しりとりゲームが始まるうち、シャッフルする。

ざわざわ・・・

「1回戦目、まずは私がデッキをシャッフルしよう・・・。その間に、君は何P賭けるか決めてくれ」

「（・・・初めの第一戦！！これが、重要な場面だ・・・！まず、勝負の流れを掴む！そして、勝ち方、負け方をしっかりと確認する！

第一戦でイカサマを見破れるとは思っちゃいない・・・だとすれば・・・）」

「それでは、5枚ずつお互いに配り、デッキをテーブルの中心に置く・・・。」

さて、決まりましたかな？」

「（・・・この5戦の中で5P賭けは1回・・・！！
これは、もっと重要な場面で使うべき、今は使う時じゃないハズ・
・・・ならば・・・）
・・・10・・・10Pだ・・・！」

「・・・了解致しました。それでは、お手元のカードをおとり下さい。

私の先行で、しりとりゲームの始まりとなります」

しりとりゲーム、始まる・・・！！カイジ、初めに賭けるのは10P。つまり、
残りは20P。これが無くなってしまうえば、その時点で負け。となると、1回しか
使えない5Pの使い道が意外に重要となるのだ。カイジは自分の手札を確認する。

「（こ、これは・・・！！単語の書かれたカードが5枚・・・！

”うがい”、”あかい”、”えがお”、”あさがお”、”いちよう”・・・

どれも、ア行で始まり、ア行で終わるカード・・・！！）「

「・・・ふむ。それでは、デッキから一枚カードをだし、ゲームを始めましょうか」

「（始まる、あわよくば、俺の命、三人の生存を賭けたギャンブルが・・・！！

注意すべきは”ん”で終わるカード。出るのは試合後半だとして

も・・・

その”ん”で終わるカードを引く確立は、試合が長引けば長引くほど確立が上がるつ。

勝負は、そう・・・迅速、軽快につ！！無能に負けては駄目・・・駄目だつ！！）「

「初めのカード・・・どうやら、”あさい”のカードから初めのようですね。

ならば、私は・・・この、”いたい”のカードを出しましょうか・・・」

初めのカードは「浅い」。先行はダービー。ダービーは手札から、「痛い」のカードを

出す。基本、しりとりと用量は変わらないこのゲーム。しかし、何処かに

イカサマがある。カイジはそう信じた。そう、信じるしかなかった。そして、次、

カイジの番・・・！！

「（・・・俺の番！！いで始まるカードは・・・あ、あった！！”イチヨウ”だ！！・・・ここまでは、特にイカサマの気配は無い、が・・・）」

「おっと、カードを出す前に、やることを忘れたのかね？」

「え・・・？」

「前に出したカード。つまり、”痛い”のカードを横の箱に片付けてから、

次のカードを置く。重ねることはしないと、ルールに記名してい

たハズですが……」

「あつ、そ、そうか……。 (ツチ、ややこしいルールにしゃがつて……!)

とにかく、様子見である1回戦!すべてにおいて、疑心暗鬼の心で向かわないと!

このルールにも、何か隠蔽があるのかもしれない……。だが、今はとりあえず、

提出するだけ……。俺のカード……。 ”イチヨウ” ……! () 「

カイジ、提出……。! 「いたい」のカードを片付け、手札から「いちよう」の

カードを出す。これで、お互い4枚と4枚。スムーズな流れで、今は進んでいるが……。

「それでは私の番……。 ”うたう” 「

「……。俺の番……。 ”うがい” ……! 「

「……。 ”胃潰瘍” ……」
いかいよう

「(う……。つ! !うで繋がられるカードが……。無い……。! !

ツチ! !……。デッキから、一枚引くしかないのか……。 (

カイジ、出せるカードが無くなる。お互い、順調にいていた中での出来事。仕方なく、デッキの一番上のカードを引くカイジ。出てきたカードは、

”あまい”。

「（つくー！……”甘い”……これじゃ、出せない……！ー）」

「Good……出せるカードがないのですな。それでは、私の番……」
「浮き絵^{うきえ}」

「（え、え、え……あ、あつた！！”笑顔^{えがお}”……！）」
「……”お塩^{しお}”……」

「（お、お、お……ツチ！！ダメだ、俺の手札には……）」

「何をやっているのですかな？君は」

「え……っ？」

「……もう、私の手札はゼロ。わかりますかな？」

「（……あ……ああ……！！！ま、負けた……！！
5巡目っ！！奴は、一度もつまづくことなく、出し終えた……
・！
これは、偶然？……偶然、なのか……！？これは、一体……
・……！！）」

「ツクツクツク……」

カイジ、第一回戦目、敗れるっ！そして、命とも思える30P中、

10Pを失い、

20Pになる。計算的には、これで一人が落ちことになるのだが、カイジは

30Pまとめてやっているため、30Pを失わなければ大丈夫なのだ。だが、しかし・・・!!

ざわざわ・・・

「（つく!!・・・考えろ、考えるんだ・・・!!
勝つことは、偶然じゃない・・・!!）」

賭博黙示録カイジ 第2話「開幕」（後書き）

（用語説明）

限定ジャンケン・・・カイジが、借金返済のためにすることになった、最初のギャンブル。このギャンブルにより、カイジの隠れた賭博の才能が開花する。

しりとりカード・・・カイジが本作ですることになったギャンブル。これを、イカサマであると信じているが・・・。

「勝つことは、偶然じゃない」・・・まさに、カイジを象徴する言葉である。運まけせの勝負の弱さは人一倍だが、「理」を備えた勝負強さは人一倍のカイジ。勝つことには、すべてにおいて理由があるのだ。

賭博黙示録カイジ 第3話「崩曲」

カイジ、敗北っ！！5戦中の初戦での敗北、まだ4戦あるとはいえ、カイジは

無能に過ごしてしまった。必然的「イカサマ勝負」のこのギャンプルを。

それは、カイジの死を刻一刻と近づかせる。

「クククッ・・・Good・・・良い表情だ。見ていて、とても爽快な気分になる」

「（くっ！！・・・。イカサマ・・・イカサマをした・・・ハズだ！！」

そうでなければ、一度もつつかからないで手札を終わらせるなんて、

そんな強運じみだこと・・・！！）」

「さあ・・・次は、カイジ君の番。デッキをシャッフルして、”ん”のカードをきとうに、デッキの下部に入れてくれ」

「（くそっ！！だが、しかし・・・見破れないっ！！まだ、不可能、不完全、準備がなさ過ぎる・・・しかし、俺の残りのPは、

20Pっ！！・・・もしかしたら・・・もしかしたら・・・！！）」

カイジの脳裏に、よぎる。そう、もしかしたら、後の2戦。

イカサマを見破れずに、敗北するのではないかと。カイジはデッキをシャッフルしながら、必死に考える。

「（負ける、のか・・・！？俺は、やっぱり負けるのか・・・！？こ、このままじゃ・・・駄目、駄目、駄目・・・っ！！つく！！・・・わずかな、わずかなキツカケさえも、見つけれない・・・！！）」

「クツクツ。カイジ君。シャッフルはその辺で良いだろう。早く、”ん”のカードを入れたまえ」

「わ、わかつてる・・・！！（ツチ！！だいたい、何が”ん”のカードを

引いたら終わりだっ！このカードを引く前に、だいたいの勝負なんて終わって・・・っ！！・・・あ、ああ・・・！！！！）」

カイジ、閃くっ！！突然、雷光の如く、閃く。それは、襲撃。ダービーを

襲撃する理論。カイジの動きが止まる。そして、手に持った”ん”で終わるカードを見つめる。

「（そうだ・・・コイツ、コイツなんだっ！！・・・いく・・・いくしかないっ！！相手のイカサマがわかったわけじゃない・・・

いや、もしかしたらこの勝負中じゃ攻略できないかもしれない！ならば、残る手は一つ・・・俺から、イカサマを仕掛ける・・・！！！！）」

「どうしました？カイジ君。何か・・・」

「い、いや、何でもない。（そのためには・・・こいつに気がつかれないように、

そう・・・この”ん”のカードを・・・デッキの下部ではなく、

中、中部の方に・・・！！下部よりの、中部へ・・・！！）」

「それと、カイジ君。次の賭けポイント・・・君の、命を賭け量を、

決めていただきますようか」

「・・・・・・10・・・10Pだっ！！俺は、10Pで行くっ！！」

（倒せる、このサギ師を・・・倒す、倒してみせるっ！！）」

カイジ、イカサマを決断つ。引いたら負けの”ん”のカードをデッキの中部。

下部よりの中部へと入れる。そして、お互い5枚ずつ手札を引き、第2戦、始まる・・・！！

「それでは、第2戦。始めましょうか、まず最初のカードは・・・”覚え”からですね。さあ、カイジ君の先行ですよ」

「（俺の手札は・・・いや、確認する必要なんて無い・・・！！クククッ・・・俺のすることはただ一つ！！・・・）」

・・・パス・・・いや、俺はデッキからカードを引く！！」

「？・・・おやおや。よほど、偏った手札を引いてしまったようですね。まあ、君がシャッフルしたんだ、君の責任。

クククッ、これだからゲームはおもしろい・・・！！」

「（・・・バーカっ！！そんなハズねえだろ！これは、もともと俺が仕掛けた罠っ！後・・・およそ、いや、確実だ！！後、

5枚、デッキからカードを引けば……デッキの一番上は、”のカードが来る!”」

それは、カイジが仕掛けたイカサマ。ダービーは気づいていない。いや、

気づくことが不可能であろう。最初一枚では。カイジの不安は、ただ一つ。

前回同様、ダービーがつまづかないでカードを終わらせること。

「……俺はこの第2戦!一度も、手札からカードを出さないっ!

いや、詳しく言うと、5枚デッキからカードを引くまで、出さない……。

できない、できないハズなんだ……俺が一度も手札からカードを

出さないで、相手が手札を終わらせることなんて……!」

「では、私はこの”得^{えたい}体”のカードを……」

「(俺の作戦はそうっ!奴に、”ん”のカードを引かせること……!!

デッキの一番上が”ん”のカードになった所で、俺の勝負が始まる!

きっと、奴はそこまでには、一回……一回はデッキから引くハズなんだ!

絶対……絶対……!」

「おや?……また出すカードが無いのですか」

「……ああ……。デッキから一枚、引くぜ。(これで、2

枚。

後3枚っ！後3枚デッキからカードを引けば、浮き出てくる・・・
勝利への鍵、生き残りへの道しるべが・・・！）」

「では、私の番。”痛い”のカード・・・」

カイジの策。それはダービーに”ん”のカードをデッキから引かせること。

ダービーの手札だけで一試合を終わらせることなど不可能と考えたカイジ。

必ず、どこかでデッキからカードを引くと考えた。果たして、うまくいくのだろうか・・・。

「・・・デッキから、一枚引くぜ・・・。

（確かに、俺は不信感を持たれるであろう・・・だが、これはイカサマじゃない！！

手札から出せるカードがあっても、場に出さなければならぬなんてルールはないっ！

完璧・・・完璧だっ！！いける、これならいける！！）」

「では、私は”いない”のカードを・・・」

「・・・一枚、引くぜ。（残り、一枚！！これで、”ん”のカードが

浮き出てくる！！）」

「・・・おや？残念なことに、最後の一枚にして、場に出せませんねえ。

仕方ない、私もデッキから一枚引きましょう」

「（き・・・来たっ！！！！これだっ！！今、デッキの一番上は、”ん”のカードっ！！」

今度、今度奴が引けば・・・必然・・・必然なる、俺の勝利！！」

「カイジ君の番ですよ？」

「あ、ああ・・・。俺は、”胃潰瘍いかいようのカードっ！！」

カイジ、第2戦、初めてカードを提出！カイジの顔が少し緩む。これで、

ダービーが後一回、デッキからカードを引けば、カイジの勝利。

「では、私は・・・”行こう”」

「・・・俺の番・・・”歌う”・・・！！」

「・・・おやおや。また出すカードが無いようですね。残り1枚にして、

本当にツキがない。では、デッキからカードを一枚・・・」

「（うつ・・・！！引く、引くっ！！・・・奴が、悪魔を・・・最強の悪魔、俺が仕掛けた地獄へと、自ら手を掛ける・・・！！」

勝った・・・っ！！」

ダービー、デッキからカードを引く。そう、”ん”のカードを手札に持っていて、黙っていたとしても、無意味。繋げられるカードが無いからだ。だからこそ、

引いた瞬間に、敗北を自ら宣言しなければならない。そして、ダービーは引く！

「……………さて、私の番。”右脳”……………」

「（ツチー！何、黙ってやがんだコイツ……………！！おまえが引いたカードは

”ん”のカードだろうがっ！早く負けを宣言しろ！！）……………俺のカード……………”魚”……………」

「……………ふう。私の、番、ですか……………」

「（クククツ……………さあ、はやくいつちまえよ！！おまえは、負け、

敗北したんだっ！！これで、俺のPは30Pに戻る。次の3戦目では

この戦法は使えないが、また新しい策を……………」

カイジ、勝ちを確信つ。しかし、それが駄目。こういうギャンブルでこそ、

そういう考えは駄目。不毛、未熟。完璧な勝利など、あるワケがない。

カイジの前に、鉄槌が下る……………！！

「……………私の番……………”お塩”……………おや？

私の手札が終わったようですね……………！！」

「（えっ……………ええ？……………ええええ……………！！？

バツ！！……………バカなっ！！！！なぜ、なんで！？奴は、

”ん”で終わるカードを引いたんじゃないのか！？何で、何で……………

「・・・!?!」

「クックック。カイジ君の残りPは10P。クックック・・・
次の一戦。10P賭けて負ければ・・・後ろの二人ごと・・・」

「う・・・うう・・・うう・・・!!」

（ど、どうしよう・・・どうしよう、どうしよう・・・!!
何で?何で勝てない?・・・俺、何で負けちゃうの・・・?
?」

カイジ、破滅。弱気になる、すべては疑心暗鬼のもと。自分の計画、策が

潰れた。その時点で、もうカイジはすべてを投げ出す。その様子を、外から見守るガッツと宗司は・・・。

「ガ、ガッツさん!!・・・な、なんか、カイジの表情を見る限り、

そーとーヤバイような予感がするんだけど・・・」

「・・・まあな。どう見ても、勝ちまくって様子じゃねえな」

「ど、どうしよう、早くカイジが相手のイカサマを見破ってくれないと・・・!!」

（漫画だと、最後の最後、カイジはいつも詰めが甘いからなあ）

「・・・まっ。どうでも良いぜ。勝てねえなら、な・・・」

「?・・・ガッツさん?」

カイジが「しりとりカード」をやっていることなど、まるでわからない二人。

しかし、どう見てもカイジが負けていることは、窓越しから確認できていた。

そして、当の本人。伊藤カイジは、すでに負けムード。汗びっしょり、半泣き状態。

「（う……うう………!!」

の、残り、ポイント………じゅ、10P………!!
これ、本当にイカサマ?………どう見ても、イカサマなんて………」

「……さあ、カイジ君。最後の勝負となるでしょう、次の一戦。始めましょうか」

「（くそっ、くそっ!!………敗北・破滅・墮落・奈落………」

ば、売春………!!し、死ぬ………俺の人生がぁ………
ここで、ここで、確実に費える!!」

「クククク………。Good………良い表情ですね、本当に」

賭博黙示録カイジ 第4話「明暗」

カイジ、破滅・・・！カイジが仕込んだイカサマをも陵駕する、実力。

ダービーは不気味な笑みを吹きかける。だが、勝負は続く。残り10Pと

なっても、カイジを、三人を地獄に落とすために、勝負は続く・・・！

「さあて、私のシャッフルの番ですね。まずは、カードをよく切つて・・・。

そして、お互いに5枚ずつ配る」

「（そう、そうなんだ・・・配る時にイカサマをしているとしたら、俺がシャッフルをした2回戦目の敗北、それが証明にならない・・・！！！

じゃあ、何？・・・何で、勝てるの？・・・ちょ、超能力・・・？）」

「ツクツクツク。」ん”のカードを下部に入れて、と。さて、私の番から始めましょうか・・・。おっと、いけない、いけない。

カイジ君の賭けポイントを聞いておかないと」

あらぬことを考え出すカイジ。これはもう、「超能力」の世界。自分
負けることは、何か必然的、神秘的な何かが動いていると、信じ始める。

震える両手、唇で、カイジは賭けポイントを決めようとする。

「(う、うう……ご、5だ……5しかない……！流れは、完全に相手っ！……ここは、5Pで逃れるしかない……!!)」

「……ふう。わかりますよ、カイジ君の心中。5Pと必死に泣きすがっている姿がね。ツクツクツク……だから、駄目なんだ。

わかるかい？カイジ君。君がここで負けて、次に勝てる保障はあるのかい？」

「なっ!!……な、何言ってやがるっ!!もう、俺達の寿命は10Pしかないんだっ！セーフティ……誰だって、セーフティを選ぶっ!!」

そんな当然のことを、いけしゃあしゃあと……!!」

「ツクツクツク……。ここで張らないような雑魚に、私は次の戦い、

負けるハズがない。そして、この戦いもね……。カイジ君、わかってるかい？

今、私達がしていることを。思い出せ、私達は今、ギャンブルをしている……。!!」

「(っ!!……な、何を……言ってやがる……。!!)そんな、戯言に……。!」

「カイジ君は今、典型的な駄目思考へと向かっている。ピンチになれば、安全圏へ……。

バカなっ……。!!考えたまえ、カイジ君。それを人生に重ねて考えたまえ。

死刑囚が外世界へと逃れる方法があるのかい？樹海に遭難した人間が、そこで

ひっそりと暮らす方法があるのかい・・・？」

「（うつ・・・！！）」

「・・・ピンチこそ、命を賭けるべき時・・・！！ピンチにならないければ、

人間は、目覚めることはないっ！！命、そう、命を張る時・・・

・・・

窮地こそが、人間を覚醒させる最大の強制剤っ！さあ・・・どうする、カイジ君っ！」

ダービーの語り。それは、眠りつつあったカイジの何かを、確かに刺激していた。窮地に陥ってこそ、伊藤カイジ、本領発揮っ！カイジは、

黙ってダービーの目を睨みつける。

ざわざわ・・・

「・・・・・・じゅう・・・１０だ・・・！！」

俺は、１０P賭けるっ！！」

「ツクツクツク、Goodっ！！最高、まことに楽しいよ、カイジ君・・・！！」

素晴らしい、実に素晴らしい意気込みだよ」

「（・・・これは、ただ奴への挑発に乗ったわけじゃない！！誘ってる・・・奴は、やはり誘っている！！決定的な勝利を持ってるからこそ、

俺を地獄へと誘っている!!……見破るべきは、今っ!!
この時だ……!!」

「それでは、デッキからカードを一枚……。ほお、最初は、
”あじさい”ですか。ならば私は、この”行こう”のカードを・
」

第三戦、始まる……。っ!!カイジ、10P賭けを宣言っ!果たして、これを
吉と見るか、凶と見るか。だが、その答えはいとも簡単に出てくる。
カイジのターン。出すカードは……。

「(……。う……。う……。!!
バカ……。バカ、バカ、バカ、バカ……。!!
俺はなんで、こう熱くなっちゃうんだよ!!……。わかってい
た、

わかっていたじゃないか!!……。理の無い勝利なんて、有り得
ないなんて……。!!」

「おやおや?……。ツクツク、カイジ君。まさか……
出すカードが無いのですかな?」

「(くそお!!……。何で俺は、こうもバカなんだよ……。!
結局、人に踊らされる、利用される側っ!……。治せない病、
救えない奴……。!!)」

……。つく!!……。い、一枚……。引くぜ……。」

カイジ、皆無……。っ!!カイジの手札に、”う”のカードで始ま
るカードは
無かった。そう、熱くなれば、張る。駄目、それでは駄目。届くわ

けない。

勝利という名の栄光に、偶然などでは届くわけがないのだ。カードを引こうとするカイジ。

「（……もう、駄目だ……。勝てる、わけがない……。強制労働、売春、臓器移植……。ま、まさか……。じ、人体……。実験……。っ！）」

「ん？」

パサッ

「あ……。っ！！（あ、ああああ……。っ！！！）」

カイジ、突然の恐怖に、失態っ！！デッキから引いたカードを、まさかの

ダービーの目の前に落としてしまうっ！半泣き状態で、すぐにカードを

拾い上げて手札に加えるカイジ。だが、遅すぎる。あまりにも、遅すぎる……。！！

「（もう、もう……。っ！！！何やってんだよ、俺はあ……。！！）」

相手にカードを見せるなんて……。バカ野郎……。っ！！もう、駄目、だ……。！！）」

「……。ふ、不運ですねえ、カイジ君。引いたカードを、表にして落としてしまうなんて……。それでは、私の番……。っ！」
「うまい」

「・・・・・・・・はあ・・・・（もう、もう、駄目だ・・・・。
死んだ、不毛に、無意味に、最悪に・・・・）俺・・・・」家
”」

「・・・・・・・・つく・・・・パ、パスです・・・・。
一枚、カードを引かせてもらいましょう）」

「（・・・・・・・・はあ、何やってんだよ。どうせ、あんたが勝つんだか
ら、
ちやつちやつと終わらせろっての。もう、俺に勝つも負けるも無
えんだからよ・・・・）

”笑顔”」

「・・・・・・・・”お塩”・・・・」

「・・・・・・・・”おいしい”・・・・」

淡々と続いていく、しりとりカード。カイジはもう、あきらめ状態。
ダービーの頭上に設置された電球が、チカチカと二人の勝負を鮮明
にする。

まるで、カイジのわずかな命の灯火のように。すると・・・・。

「・・・・・・・・つく・・・・ま、また、カードを引かせてもらいます・
・・・・・・・・！」

「は、はあ・・・・？（さ、さつきから、何やってんの、こいつ？
もう、俺の負けだろうが。はあ・・・・、本当に、何してんだが・
・・・・）

”衣装”」

「・・・・・・・・・・”浮世絵”・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・”エチオピア”・・・・」

「・・・・・・・・・・”アサガオ”・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・”大きい”・・・・・・・・えっ？・・・・・・・・お、俺・・・・・・・・終わった・・・・・・・・」

お、終わった・・・・・・・・終わったあ！！やった、やった、やったあ
あ！！

勝った、勝ったぞっ！！ひいゝゝゝっ！！」

「つく・・・・・・・・！！」

それは、突然っ！！カイジ、初勝利っ！まさに、地獄の底からの脱出。

カイジ、計20Pを制すっ！喜びにくれるカイジ、なぜ勝利したのかはわからない。

だが、今はそんなことどうでも良かった。くやしがるダービーだが・・・・・・・・。

ざわざわ・・・・

「ま、まあ、これでこそ、ギャンブル・・・・・・・・Good・・・・・・・・構いは、しません。

・・・・・・・・クククク・・・・・・・・そこで、一つ・・・・・・・・水をさすようで悪いが・・・・・・・・

ここでちょっと、お楽しみタイムと、いこうか・・・・・・・・」

「？・・・・・・・・な、何だよ・・・・・・・・！！」

「……理不尽、……そう、理不尽と思わないかな、カイジ君？」

外で待っている二人は、何もわからない。もしかしたら、本当に何も知らされないうちに、地獄に落ちる可能性がある。カイジ君のせいで……」

「は、はあ……？……な、何言ってやがる……！」

「……そこで、だ。彼らに、私達が便宜を図って、チャンスをやろうと思う……！」

今、獲得した20Pっ！！その20Pで彼らは脱出する権利を与えるというねっ！」

「な……っ！！ふ……ふざけるなあ！！ま、まだ、勝負は途中だろ！！」

ふざけんな、ふざけんな……っ！！」

「そう、途中だが。全部で5戦。そして今、3戦を終了した。つまり、

もう二人分はやったという計算になる。ならば、彼らに脱出する権利はある……！」

「（バ、バカなっ……！！くそ、くそ、くそ、くそ……！！）

そうか、これだったのか……わざわざ、6戦じゃなく5戦にしたのは……

このためだったのかよ……！！）」

「外の二人に今、説明している所です。ツクツクツク、さあ、どう

なるかな、カイジ君？

もし、二人が脱出してしまえば、君は．．．．破綻っ！死．．．
．！．！」

「（う．．．．っ！！！）」

それは、まさに最悪の展開．．．！！カイジの予想をはるかに上回る、最悪の

思考っ！裏切られる。そう、カイジの脳裏によぎる。そのころ、救済の説明を

受けた宗司とガッツは．．．。

「お、俺達が．．．助かる．．．。で、でも、それじゃ、カイジが．．．！！

まだ、試合が残ってるなら、助かる可能性はまだあるっ！そんなの受け入れるわけ．．．」

「．．．．一人、10P．．．．だよな．．．」

「？．．．ガ、ガッツ、さん．．．？な、何、言ってるんですか．．．
．．．？」

ま、まさか．．．．っ！！！」

「．．．あいつが今後、勝てる保障は無え。俺は、ここで抜けさせてもらっぜ」

「なっ！！！！．．．何言ってるんですか、ガッツさんっ！！カイジが

頑張ってギャンブルしてるってのに．．．！」

「……だから、何だ？俺の分を奴は背負ってくれた。利用したんだよ、俺は。」

あいつをな……これ以上、何か説明があるのか？」

「……そ、そんな……やめろ……やめろっ！！ガッツっ！！
あんた、なに考えてんだっ！！あんた、仲間をいとも簡単に裏切る男だったのかよっ！？」

「……今頃、もしかしたら……キャス力は、
死んでるかもしれねえんだ……！悪いな、あばよ……」

「ガ、ガッツ……ガッツ……ガッツ……ふざけんなっ……だからって、

仲間を裏切っているのか！？ガッツ、答える……ガッツ……
「っ……」

ガッツ、裏切り……！！それは、衝撃だった。そう、地獄に落ちてしまった。

完全に。残り2戦、残りポイント、10P。一戦も、負けない……
……！！

賭博黙示録カイジ 第5話「小光」

絶望……！！ガッツ、裏切るっ。その光景は、中でギャンブルをしている

カイジの目にも鮮明にわかった。さきほどの勝利の喜びは、一掃。一転、半なき状態でうつぶせになるカイジ。

「な、何でえ……。何で……。こうなる、んだよ……。っ。」

俺は、どうして……。いつも、いつも……。バカなんだよ……。！！！」

「ツクツクツク。さあ、カイジ君。始めましょうか、第4戦。君のシャッフルからですよ？ツクツクツク……。」

「（裏切られる……。味わったじゃないか、……。もう、何で分らない！？）

俺達は……。人間なんだっ！！……。そうだ、そうなんだ……。！！！」

人間である限り、絶対なんて……。ありえないんだ……。！！！」

「……。さあ、カイジ君。残り10Pですよ。シャッフルを……。」

今のカイジに、ダービーの声は聞こえていない。ガッツの裏切りにより、せつかつかめたわずかな可能性が、水の泡。絶望の淵。奈落の一步手前。

こうなると、人間はもうどうにもならない……。

「（勝てるわけ……ないだろ……。さっきの一勝だつて、

まぐれじゃないかつ……！……続くわけがない、まぐれ如きが……！

負ける……後2戦、負けるっ！……し、死ぬ……！！！！）」

「……さあ……カイジ君……！！」

「う、うう……う、うっ……」

（もう、駄目だ……。酷い、酷すぎる……。！！俺でも、裏切るっ！あんな数分ばかり語っただけの人間、簡単に裏切るっ！

……。当然だ……。俺達は、人間なんだから……。！！）」

カイジ、圧倒的な負け思考。ガッツの裏切りで、気が動転。宗司が残っていたとしても、ピンチは変わらない。余裕の表情で、カイジを見るダービー。もう、決定した。この勝負の、勝者が……。

「（でも、でも何で……。何で、あんな酷いことをするんだ……。！！！

人間、かよ……。！！……。ん？……。俺、……。今、何て言っただ……。？）」

「さあ、カイジ君。時間がありませんよ？」

「（……。何で、ダービーは外の二人を助ける必要があつた……

・・・？

そうだ、奴は常勝のイカサマをしている。ならば、3回戦での俺の勝利は

偶然だとしても、残り2戦で俺は敗れるハズ・・・・・・・・！！なら、なぜだ？

ここで、二人を助ける意味はないハズだ・・・・・・・・！！」

ざわざわ・・・・・・・・

「（そうだった！！考えてみれば、ここがもう不可解なんだつ・・・・・・・・！！

助ける必要なんて、無いっ！！・・・・・・・・じゃあ、なぜ助ける・・・・・・・・！！？

その答え・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・ああ
あ・・・・・・・・！！

そう、答えは・・・・・・・・俺・・・・・・・・俺だっ！！・・・・・・・・今の、俺の状態だっ！！）」

カイジ、目覚める。この土壇場、最悪の状態で、カイジの目に火が灯る。

それは、かつてカイジが幾度のピンチを潜り抜けてきた、狂犬の刃。強者に噛み付く、最後の意地。

「（俺の状態、そう、この絶望状態を作るために行ったんだ・・・・・・・・！！！！

実際、さっきまで俺は何も考えられなかった、裏切り、その一言で・・・・・・・・。

ならば、もう一つ・・・・・・・・なぜ、その状態を作らせた？・・・・・・・・なぜ、なぜだ？）」

「……少々、時間が掛かりすぎますな、カイジ君。早くしないと、

強制的に君の敗北に致しますよ」

「わ、わかってる……！！（なぜ、なぜだ！？考えろ、考えろ……！！）

……何かを、ごまかす……隠す、ため……何を、隠す？……隠すほどの、俺は何かをしたのか……？

……そうだ……俺は、勝った……3回戦、俺は勝ったんだ！！」

ざわざわ……

「（そう、俺の勝ちっ！！よく考えれば、これがもつとも不自然じゃないかっ！

これは、イカサマの勝負……俺が勝つことなんて、有り得ないっ！

……俺は、勝つための何かをした……それを、奴は隠そうとしている！！）」

ざわざわ……

「（思い出せ……！！俺は、何をした！？3回戦……1回戦や2回戦には

しなかった、何かをしたハズなんだ……！！俺は……俺は……

……そう……そうだっ！！カードを……相手に、見せたんだっ！！！！）」

答えが、ゆつくりとあぶり出てくる。それは、勝利へのわずかな糸。このイカサマの、真実。カイジの頭の中で、解けないパズルが、ゆつくりと

集まっていくな。欠けていたピースが、ゆつくりと……！

「（俺のカードを見せたことで、相手が不利になる……！！なぜ、なぜだ！？考えろ、考えろっ！！……なぜ、相手が不利になる！？）」

ざわざわ……

「（……待て、落ち着け……見るべきは、見えな
いものじゃない！

見えるものを、確実に見るんだ……！！奴の周りを、もう一度見る！！

……何か、変わった物が無いか、観察するんだ……！）」

「

カイジ、ダービーの周りを観察……！そこに、何か答えがあるハズなのだ。

欠片、たとえ、ゴミ程度の用量しかない欠片の可能性。それでも、十分。

たったそれだけでも、今のカイジには欲しかった。

「（見る……見るんだ……。奴の周りには、何がある……？

俺と共に使っている、大きなテーブル……そして、奴の真上に
つる下がっている、今にも電池が切れそうな電球……ん・
……？）」

「……シャッフル、して下さい。カイジ君」

「……あ、ああ。わかった、ぜ………。」

（何で、電球が、奴の真上にしかない？……普通、俺とこいつの間。

その真上につるすはず……なんで、こいつの真上なんだ……

……？

……あつ………あ………あああああ………！！
「！！」

デッキをシャッフルするカイジの手が、止まるっ！！雷光が、カイジの

頭に突き刺さる。すべての欠片が、今、集結したっ！

「（……答えが………答えが………出た………！！！！

だから、奴は俺のカードを見たために、勝てなかったんだ………
「！！！！」

ざわざわ……

「（ツチ………だが、どうする！？イカサマを見破った。

だが、それだから、どうする！？………利用する手立ては………
………。

ま、待てよ………。。………あ、ある、一つだけ………！！！！」

「………シャッフルはその辺で。さあ、カイジ君。次のポイントと、

”ん”のカードをデッキに………」

「（・・・一度、破滅・・・奈落に自ら堕ちる・・・。
が、これしか、無いっ！！！！・・・あいつを・・・ダービ
ーを・・・

叩き潰すには、この手しかないっ！！！）」

ざわざわ・・・

「・・・次のポイント・・・ご、5だ・・・！！！！」

「・・・まあ、そうでしょうね。それでは、その”ん”のカードを
入れて、

試合を始めましょう。君からの先行ですよ」

「あ、ああ・・・。（仕掛けるべきは、今・・・！！
この”ん”のカード・・・こいつに、細工を・・・する・・・
・！！！！）」

ガリッ

カイジ、運命の瞬間、来る・・・！！カイジは、”ん”のカードに、
何らかの細工をする。果たして、これが勝利への道を示すことがで
きる

のだろうか・・・？第4戦、いよいよ、始まる・・・！！

「（この”ん”のカードの細工・・・これに、すべてがかかって
いる・・・！！！！）」

賭博黙示録カイジ 第5話「小光」(後書き)

〈用語説明〉

裏切られたカイジ・・・かつて、命を決したギャンブルで、最後の最後、自らの友に裏切られた伊藤カイジ。しかし、その甘さは後にも治ってはいない。

賭博黙示録カイジ 第6話「暴君」

第4戦、始まる・・・！！ここでカイジ、5P賭け。表では、確かにこの1戦、負けても死ぬことはない。だが、この1戦、負ければ

後に光明無し・・・！助かるとしても、一人！

「・・・デッキをシャッフルして・・・

5枚ずつ配る・・・（たのむ、うまくいっていきれ・・・。
あの作戦がうまくいかなければ、俺はあ・・・！！）」

「さて、と。カイジ君。デッキの一番上のカードをめくってくれ。
第4戦の・・・始まりだ・・・。」

「・・・ああ・・・始まるぜっ！！

（最初のカード・・・赤い”っ！！”

ついに始まった勝負。カイジは、この第4戦が始まるまえに、何か細工をしていた。恐らく、この勝負に勝つための何かであろう。そうでなければ、いけない。そうでなければ、カイジは・・・。

「（俺の手札・・・”あじさい”、”いたい”、”うがい”、
”笑顔”、”エイ”・・・まずは、”いたい”のカード・・・
・！！）」

「ほお。”痛い”・・・ですか。ならば、私は”胃潰瘍”
のカードを・・・。」

「・・・俺は、”うがい”・・・！！」

「……私は、”イチヨウ”……」

淡々と進んでいく、しりとりカード。だが、まだダービーは気づいていない。

カイジが、「ん」で終わるカードに何らかの細工をしたことを……。

それが、果たしてどのような意味を持つのか……？

「……俺は……一枚、引くぜ……」。

（引いたカード……”つち！！”青い”……！！）「

「ツクツクツク……さて、私の番……まあ、パスとして、一枚……引きましようかな」

「つ……！（な、なんだ……？なぜ、奴はパスをした……！！？偶然、なのか……偶然の、ハズだ……）「

「さあ……カイジ君の番ですよ」

「つ……！！……わ、わかってる……！一枚、引くぜ……！！（つく……！！……”アジサイ”……だ、駄目か……！！）「

「（ツクツクツク……カイジ君。すべて、すべてお見通しですよ。」

このダービーにはね、……ツクツク……！！）「

不敵な笑みを浮かべるダービー。カイジ、焦る。もしかしたら、そんな

言葉が、カイジの脳裏を支配する。偶然か、はたまた気まぐれなのか、

ダービーはイカサマをしてこない。

「（・・・バ、バレて・・・いるのか・・・？

お、俺の・・・俺の、仕掛けた罠を・・・見破っているのか・・・！?）」

「さて・・・私の番・・・うん、Good・・・とはいえま
せんねえ。」

一枚引きましょう」

「（お、俺はさっき、”ん”で終わるカードに細工をした・・・
！！

いや、細工なんて丁寧な言葉なんかじゃない、目印をつけた・・・
つまり、傷をつけた・・・！！それを・・・奴は、見破っている・・・！?）」

「さあ・・・カイジ君の番ですよ・・・？」

「わ、わかってる！！（つく！！き、気づかれた！？バ、バカな・・・！！

一瞬、たった一瞬だったのに、傷をつけるときなんて・・・！！
い、一枚・・・引くぜ・・・」

カイジは、”ん”で終わるカードに細工をした。恐らく、今度こそ、確実にダービーに”ん”のカードをデッキから引かせるために、細工したのだろう。

だが、これが裏目。ダービーは、気づいてしまっているのかもしれないのだ……。

「（くそっ！！……つ、つなげられねえ……引いたカードは、”多い”！！」

バレ、てる……？もし、バレているとしたら……
奴が、俺の細工に気づいているとしたら……や、やばい……！！）」

「ツクツクツク……。さて、私の番……。
おやあ？また、カードを一枚、引かないと……。」

「（……ルールに記述してあったとおりのことが起きる……！！」

イカサマが発覚した場合、処罰は相手が決める……。
な、何を……。される……。？……。か、体の一部を……
失うのか……。！？）」

「……さあ、カイジ君の番」

「（だ、駄目だっ！！次の一枚！！デッキから一枚引けば、俺が傷をつけた”ん”のカードが浮き出てくるっ！もし、もし、やつが気づいていたら！！」

俺は……。俺はあ……。！！）」

「……。ツクツクツク……。どうしました？カイジ君……。
」

「……。つぐ……。！！（ひ、引くしか……。ねえ……。
！！」

た、たのむっ！！気づくな．．．気づくなあ．．．！！！！」

カイジ、デッキから一枚引くっ．．．！！ダービーがカイジのイカサマに

気づいていないことを祈り、決死の思いで引く。だが、その思いも、あっけなく裏切られる。そう、それはつまり．．．！！

「おやあ．．．カイジ君。おかしいですねえ．．．」

「っ！！！！．．．な、．．．なんだよ．．．」

「．．．このデッキの上のカード．．．おやあ．．．傷．．．目印がついていますねえ．．．カイジくん．．．

！！！！」

「っ！！！！（あ．．．あああ．．．あああああああああ！！！！）」

「Good、Good、Good、Goodっ！！！！カイジ君、やってくれましたねっ！！

イカサマ、イカサマだよ、カイジ君！！！！」

カイジ、失態．．．！！見破られていた。すべては、ダービーに見破られていた。

絶望の淵。圧倒的、地獄。カイジ、口を開いたまま、動けなくなる。ダービーはただ、悪魔のように高笑いする。

「さあっ！！！！カイジ君。処罰は私が決める約束でしたよねえ！！？ Goodっ！！！！さあ、それでは．．．どうしましょうか．．．」

「・・・・・・・・つぐー!!!」

「・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・カイジ君・・・・・・・・。ほれ・・・・・・・・カイジ君」

「・・・・・・・・?・・・・・・・・ナ、ナイ・・・・・・・・フ・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・そう。ご安心を、カイジ君。別に私は、君の足や腕。耳や目などの器官を奪うことなんてしないよ・・・・・・・・ただ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つー!!!・・・・・・・・ま、まさ・・・・・・・・かあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうですね、カイジ君・・・・・・・・5・・・・・・・・5本ですね・・・・・・・・。そのナイフで・・・・・・・・5本、歯を剥ぎ取ってもらいましょうか・・・・・・・・」

「うつー!!!!!!・・・・・・・・あ、ああ、うつ、つぐう・・・・・・・・!!!!」

まさに、狂気の沙汰・・・・・・・・!!ダービーが要求した処罰。それは、ナイフで自らの歯を5本、くり抜くというものだった。ナイフを持ったまま、

半泣き状態で震えるカイジ。

「・・・・・・・・さあ、カイジ君・・・・・・・・やっておくれ・・・・・・・・さあ、さあ・・・・・・・・!!!!!!」

「つぐ!!……ぐ……う……う……
ぐうううう……っ!!」

グサッ

そこからは、まさに地獄。カイジ、狂ったかのように、手に持ったナイフで自分の歯を、血塗れになりながら剥ぎ取っていく。わかっていた、ここで

この処罰に抵抗しようとしても、不可能だということを。だからこそ、

カイジは素直に、地獄へと舞い降りた……。

「はぁ……はぁ……はぁ……!!」

「クッククク……Good……ちょうど、5本、です。ね……。」

必然的に、この4戦はカイジ君の負け。ゆえに、残りポイント5Pから、

最終決戦……第5戦へと挑みましょうか」

「……ろす……。」

「……?……。」

「……殺す……殺してやる、ダービー……!!」

「……見てろ、今度は貴様が……地獄を見る番だ……。」

「俺は……俺は、容赦しねえ……!!」

「……ツクツクツク。クズのたわごとですねえ、カイジ君。
さて……この傷をつけられた”ん”のカード……どうしま
しょうかぁ……。」

予備のカードは用意してきていない……仕方ない、使うしかあ
りませんか」

「……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……。」

（……か……掛かった……！！！！）

奴は……俺の罠に……掛かったぜ……！！
！）」

カイジ、不敵……！！それは、地獄での保険。まさに、常軌を逸
した罠。

カイジ、第5戦で、勝利を掴み取ることができるのだろうか。
そして、運命の第5戦が、始まる……！！

「……それでは、私の番ですね。デッキをシャッフルして……
・

お互いに5枚ずつ配り……そして、”ん”のカードを入れて
と……。」

「……はぁ……はぁ……。」

「……ようやく、これでカイジ君の生涯が費えるわけですね。

この一戦……終われば、君の人生はもう紙クズ以下……！！
！！

破滅、奈落、崩落、暴落、崩壊……死……！！」

「……はぁ……はぁ……はぁ……。」

ク．．．ククツ．．．．．」

「．．．何が．．．．．何がおかしい、カイジいい！！！」

「．．．．．ボケてんな、おまえ．．．．．。
救いようもなく、ボケてるぜ．．．．．！！！」

「．．．．．フ．．．フツ．．．ハツハツハツハ！！
おもしろい、おもしろいよ、カイジ君！！やっぱり、君は素晴らしい！

君のようなクズほど、家畜になって人生を終わらすのに相応しい！！！」

「．．．．．はやく、始めようぜ．．．．．
逃げるなよ．．．．．いや、逃げさせない．．．．．！
おまえを．．．．．殺すまで．．．．．！！！」

「．．．．Good．．．．．さあ、始めようか！！生死をかけた、
第5戦！！！」

こうして、運命の一瞬、来る．．．！！カイジの罠。それは、
ダービーも気づかぬ、狂人の思考。暴君と化した、退路無き人間の
すべてを賭けた一筋の、攻撃．．．！！

「．．．．．ククツ．．．．．なあ、ダービー．．．．．」

「．．．．．うるさいぞ、カイジ．．．！！！」

「．．．．．俺の手札．．．．．見せて、やろつか．．．．．」

「っ！！！！！？」

ズララッ

「なっ！！！！・・・な、何をしだすんだ、貴様はっ！！

じ、自分の手札を・・・表にして、テーブルに置くなんて・・・

・・・！！

っぐ！！トチ狂ったか・・・！！」

「・・・・・・そう、かな・・・・・・」

カイジ、暴挙・・・！！何と、自分の手札を、テーブルの上に表にして出してしまふ。勝つ以前の問題。まさに、破滅への終局。かと、思えた・・・だが・・・！！

「っ！！！！・・・ま、待て、よ・・・・・・。

あ・・・・・・ああああ・・・・・・！！！！」

「・・・・・・ククッ・・・・・・」

「（こいつ・・・・・・こいつ、まさか・・・・・・気づいたのか・・・！！！！？」

私の完璧な・・・・・・このしりとりのゲームのイカサマ・・・このカスが・・・・・・辿り着いたというのか、真相に・・・！！？）」

「・・・・・・さあ・・・・・・やろうぜ、ダービー・・・！！！」

賭博黙示録カイジ 第7話「一転」

カイジ、反撃……!! すべては、この一瞬のために。カイジ、地獄の淵での最後の、逆転を賭けて。暴拳、手札を全部、相手に見せる。

それになぜか、焦りを感じるダービー。そう、彼も気づいてきた。ようやく……。

「(バレて、いるのか……!? このダービーの、天才イカサマ師の策略を、

あんなゴミのような、若造がつ!!……つく!! バカな、バカな!!

ありえない……ありえるかああ……!!!()」

「……ククツ……さあ、アンタの番だろ？」

はやく始めようぜ……最終決戦をよお……!!」

「ぐうう……!!!(バ……バレる……!!!

奴は……この”しりとりカード”のイカサマを、気づいたあ……!!!()」

ダービー、発覚……! 彼の読みは正しかった。この最後の場面に、

彼は正しい判断を導き出した。常人では有り得ない思考、だが、彼は導いた。

そう、自分のイカサマがバレていると。それは図星、図星だった。

「ぐうう!!……グ……グズ如きが……!!!(そう、このしりとりカードの一枚一枚が……3Dカードつ

!!

いや、そんな丁寧ではない・・・光の反射によって、違う文字が浮き出てくる

反射カードとも言うべきかつ!!」

「・・・・・・ククッ・・・・・・」

「（故に、例え”エイ”のカードがあつたとしても、光を照らすことで、

違う文字・・・・・・”甘い”という文字が浮き出てくる・・・・・・
!!

それに・・・・・・奴は気づいた・・・・・・!!」

「パス、なのか・・・・・・？出せるなら、早くしろよ、ダービー・・・・・・。

さあ・・・・・・どっちなんだ・・・・・・!!」

「ぐっ!!!（やはり、バレているっ!!その光の反射の元・・・・・・つまり、電球の光も、私の足元のスイッチで切り替えている・・・・・・!!!

出せるカードが無いときは、電球のスイッチを押して、違う文字をあぶりだす・・・・・・!!

こんなに・・・・・・こんなに完璧なイカサマなのに・・・・・・なぜ、なぜえ・・・・・・!?!」

困惑するダービー。そう、しりとりカードのカードすべてが、「反射カード」だった。光を当てることによって、違う文字が浮き出てくる。

そう、その光もダービーがスイッチを使って操っているのだ。これぞまさに、

イカサマ。最悪の勝利への方程式である。

「わ、私の・・・カード・・・え、”笑顔”・・・！」

「・・・ククッ・・・随分、トロいな・・・。」

まあ、アンタはビビりながら待つてろよ・・・。」

俺が・・・いち早く、地獄に送りこむのをなあ・・・！」

「こつ！！この、ガキイイイイイ・・・！！！」

（だから、だから奴はカードを表にしてテーブルに並べたのだっ

！！

奴が手札を手元に持っている間は、自分が影になってしまつて、

光の反射は届かない！！故に、文字は浮き出てこない、だがつ・

・・・！！）

「・・・まあ、俺の出すカードは・・・。」

アンタも見えちまつてる分、楽だぜ・・・俺のカード・・・

”重い”

「（今は別つ！！テーブルに表にしたことで、奴のカードも光に反射してしまう！！

・・・そう・・・つまり、私の光の反射スイッチは封じられた・・・！！

もしやってしまえば、地獄の門を自分で開くと同じこと！！

目の前の手札の文字が変わる、逃れられないイカサマの証拠っ！

！）

「（フッフ・・・気づいてきたようだな、ダービー・・・。」

おっかねえのは・・・これからだぜ・・・。）

カイジ、圧倒的な反撃……！！ダービーのイカサマを、完全に阻止した。

いや、そうではない。ダービーはまだ気づいていない。このカイジの「策」がまだ、

「罠」だということに、気づいていない……。

「つぐ！！がつ、が！！……」

（カス、ゴミ、グズ、チリの分際でえええ……！！！！この私が、真剣勝負を強いられるなんて……くそ、くそ、くそ……！！！！）

「……おら、早くしろよ」

「……つち！！（だが、まだ勝つ可能性が無くなったわけじゃない！！）

ここで勝てば良いのだ！なあと、結局は運否天賦の勝負に戻っただけ。

まだ負けたわけじゃない！！！！」

「……早くしな……ダービー……！！！！」

「……わかっている！！つく、一枚……引くぞ……」

「……ククツ……それだぜ、ダービー……その意気だ。俺は……そうだな、俺も一枚引くぜ」

ここにきて、ようやく真剣勝負。イカサマ無しの、真剣勝負がようやく

最終決戦にて、行われる。だが、運はダービーを見放す。手札に、

繋がるカードは・・・無しっ!!

「チいい!!・・・一枚、引くぞ・・・!」

「・・・フツ、怖えだろ・・・真剣勝負つてのはよお、ダービー。」

何が起きるか分からねえから、おもしろい・・・!!

俺も・・・一枚、引くぜ」

「（なにをバカなっ!!このクズ!!少し、私を策にハメたところで、

調子の乗りおって!!たたき殺すっ!・・・勝つ、勝って殺す!!）

・・・ぐうう!!・・・い、一枚・・・引くぞ・・・」

「・・・俺も・・・一枚、引こうか・・・」

互いに、手札に出せるカード無し。一見、ダービーに手札を見せている分、

カイジの不利かと思うが。だが、どちらも同時進行にカードは進まない。

デッキのカードだけが減っていく。そして、運命の時、来る・・・!!

「（くそがあ!!・・・こうも引きが悪いと、胸クソが悪くなる・・・。

このままでは、デッキに眠る”ん”のカードが・・・

?・・・”ん”の・・・力、力、・・・カードお・・・

・・・?)」

「あ……あああ……!!」

「もしかしたら……この”ん”のカード……
違う文字が出てきたり……するかもなあ……なあ、ダービ
ー……!!」

「だ、駄目……駄目ええええ!!」

この時、すべての決着が着く。そう、これこそカイジの「罠」。第
4戦で

”ん”のカードにしるしをつけたのは、このためだった。わざと、
”ん”のカードを

誇張するため。テーブルには、光が照っている。つまり、”ん”の
カードを
表にして出せば……。

「……はあ……はあ、はあ……。

（だ、駄目なあ……い、息が、出来ないっ……
!!

お、俺があ……俺がああ……ま、負け、た……
」

「……イカサマ、認めたようだな……ダービー……
」

「……はあ、はあ、はあ、はあ」

「……一番、ここが重要だった。ただ単に、この3Dカードの
イカサマをバラした所で、アンタは急いで電球のスイッチを切る

だけ……。

流されることは目に見えてた。大きな代償払ったが、……これで……

アンタを……突き落とす……地獄に……!!」

「……や、やめて……やめて、くへえ……」

完全に、敗北したダービー。”ん”のカードをカイジに引かれれば、イカサマがバレる

決定的な証拠になる。だが、自分が引けば必然的な敗北となってしまう。

もう、逃げ道は無かった。

「……殺す……そうだな、ダービー……。

イカサマをした場合、俺が決められるんだよなあ、処罰……。

俺は、容赦しない……ダービー……目だ……」

「!?!?!?」

「……いや、足りねえな。両目だ……いや、両耳もだつ!!」

……そうだ、歯の借りも返さないとなあ……全部の歯も、剥ぎ取らせる!!

……ついでに、鼻もそぎ落とそうかあ……?」

「い、いやああ……やめて……やめてくれえええ……」

「……言ったハズだ……容赦しないと……。

やれよ、ダービー……やるんだつ!!!!」

「・・・・・・・・あ、あああああああああ!!!!!!」

絶句するダービー。カイジの要求は、両目、両耳、全部の歯、そして、鼻。

まさに、容赦のない、処罰。その運命に、絶句するしかないダービー。

だが・・・・・・・・。

「・・・・・・・・まあ、俺としてもそんなことはしたくない・・・・・・・・。だから、だ・・・・・・・・俺と、そして外の連れ・・・・・・・・計二人だった！！

外に開放しろっ！！」

「・・・・・・・・わ、わかった！！わかった、わかった、わかった！！！！だから、頼むっ！ゆるしてくれええ・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・もう、いいよ・・・・・・・・。もう、いい・・・・・・・・本当に、たくさんだっ・・・・・・・・。これ以上・・・・・・・・人が、堕ちる所なんて・・・・・・・・！！」

カイジ、完璧なる勝利・・・・・・・・！！時折、歯を5本失う支障があったが、

見事、最初の目標どおり、全員を外に解放することに成功。

そして、彼の熱いギャンブルは幕を閉じるのであった・・・・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849b/>

マンガ・パニックっ！

2010年12月14日19時50分発行